

エキセントリシティ

本作品は映画『HELLO WORLD』のスピノオフアニメ『ANOTHER WORLD』の二次創作です。

eccentricity [eksəntri'siti, -sen-i]

- 1 [U] (言動・性格・服装などの) 異常、風変わり (なりふ) 《in, of》。異常も、変わり具合
 1 a [C] [エクセントリシティズ] 常軌を逸した行為、奇行、奇癖
- 2 [C] 《機械》偏心 (距離)。《数学》離心率

(小学館 ブログレッシブ英和中辞典 第五版)

第一 章 2032年 夏

(1)

「てかおー、^{かたがき} 堅書君……だっけ？ あいつ何なの？ 休み時間もずっと勉強しててマジ怖
 いんだけど」

「私も思つた！ せつかく同じ班になつたのにさ、話し掛けるなつてオーラ出てるし、協
 調性ゼロって感じ。この飲み会も速攻断るし。最悪」

女子一人がハイボール片手に欠席裁判で盛り上がりつてゐるのを、冷めたポテトフライをつ

まみながらあたしはぼんやり眺めている。ハデ目のメイクにショートヘアの子と、雰囲気が小動物系でぱつつくボブの子。心の中で勝手にハデ子と小動物ちゃんつて呼んでる。思つたよりこいつら口が悪いなー。さつきまで一緒になつてバカ騒ぎしてたけど、なんかちょっと醒めた。まあ変に善人ぶるよりは正直でいいのかもだけどさ。

「まあ……。用事あつたのかもしけねえしさ。明日、課題一緒にやろうつて誘つてみようぜ」

「だよな、急だつたし……。堅書君、前から実験一緒だつたけど、悪いやつじやないよ。コミュニケーションだけで」

変なTシャツの男子と眼鏡の男子は、ヒートアップする女子組をなだめにかかつてる。このまま女子が結束しちゃつて、女子と男子が断絶しちゃうのを恐れてるんだろうな。こつちもまあ、女子の悪口に迎合するよりは全然マシ。でも変T君も眼鏡君も完全にやり方間違つてるし、すっかりハデ子と小動物ちゃんに気圧けおされてる。

この空気がデフォになつちゃつたら面倒だなー、と思いながら塩キャベツを口に放り込む。頼んだ生レモンサワーは全然来ない。

三条の 大衆居酒屋。三回生前期の演習の後半は、六人の班単位で課題をやることになつていて、今日は結成記念の飲み会だつた。

厳正なる抽選の結果、うちの班は男女三人ずつっていう工学部にしては奇跡的な構成になつて、合コンかよとかイカサマじやねつて怨みのこもつた視線が、男子率100%の班からガンガン飛んできてた。しかも今夜のこの飲み会は男子一人が欠席したことで、集団としてのレア度はさらにSSRまで跳ね上がつてたりする。

その欠席者が、さつきからこのテーブルでめっちゃ話題の堅書君だ。学科の中でも印象薄くて、そういういたつけ、つて感じのやつ。たぶんこれまでわたしはしゃべったことなかつたと思う。

班分けが終わつてTAさんが課題を説明してる間、堅書君は何か英語の本をずーっと読んでた。どう見ても演習と関係なさそうな、医学っぽい表紙の本。何やってんだろこいつ、つて思つた。演習の後、親睦会を兼ねて飲みにでも行こうかつてみんなで盛り上がりつてる横で、堅書君だけはリュックに荷物をまとめて、そそくさと帰ろうとしてた。眼鏡君が「飲み会、行かないの?」って声をかけたら、「いや、その、そういうのちょっと……。すいません……」とかなんとかモゴモゴ言いながらスースと消えてつた。そりや、心証悪く

するわ。あたしだってさすがにちょっとイラッとした。

でも、まあ、このまま悪口大会になるのもなんかイヤだった。せつかくのお酒が不味くなる。

「へえ、堅書君と実験一緒だったんだ！ ……あ、レモンサワーこっちでーす！」

やつと運ばれてきたサワーとレモン絞り器を受け取りつつ、眼鏡君の会話からバスをつないで、話を少しばかしポジティブな方向に持つてこうとする。ていうか、あのコミュ障野郎と知り合いなの、めっちゃ助かる。通訳代わりになつてもらおつかな。本人とはまともに話できそうにないし。

「ああ。一回生の物理学実験。ちょうどあいつと二人一組だったから」

眼鏡君は、箸で焼鳥を串から器用に外しながら答えた。

「物理学実験つてあの、めっちゃキツいってやつ？」

「うん、それ。レポートがすっげえ地獄でさ。で、堅書君に毎回見せてもらつて」

「え、マジで!？」

「実は重宝する系?」

「それめっちゃ助かるわー」

「見せてもらいくらいすぎっしょ」

予想外の耳寄り情報に、みんなが一気に食いつく。少なくとも戦力としてはカウントできそうで、少しほつとした。

「マジ。あいつ人見知りなだけで、話すとまあ、普通にいいやつだし、課題とかもちろんとやるタイプ」

「なんだ、サボる気満々なんかなって思つてたわ」

「だよね。人の話、ぜんつぜん聞いてなさげだつたし」

「そこは大丈夫だと思うよ。基本、真面目だし、頭もいいしね。……あ、でも」

眼鏡君はちょっとと言いよどんで、ジョッキに残つたビールを一息にあおつた。

「——昔はもう少し人付き合い良かつたかも。飲み会とかも一応出てたし、あんな勉強一筋つて感じじやなかつた。なんだろうな、もうちょい人生楽しそうだつたつていうか」

何やら不穏な流れに、全力でレモンを搾つてたあたしの手が思わず止まる。

「え、なにそれどゆこと?」

「んー、なんかあいつ、最近ちょっと変わったんだよね。前はもっと普通だった」

さつきまでボロクソ言つてた女子組もヤバつて顔をしてる。

「は？ やっぱ今は普通じゃないってこと？ てか、昔は飲み会出てたんだ？ それってなんか余計ムカつかない？」

ああもう、またそっち方向に話戻さないでよ、とハデ子に内心うんざりしてると、「俺の見立てによるとだな。……それはばり、彼女に振られたんだな！」

と斜め横から断言調で迷推理が飛んできた。変T。なんでうれしそうなのこいつ。

「えー、『彼女』未満の段階なんじゃない？ 片想いの相手に告つて玉砕した的な？」「絶対それ！ どう見ても、彼女いない歴イコール年齢つてやつ！」とケラケラ笑う女子たち。なぜか言葉に詰まる変T。

だけど、それを眼鏡君は即座に否定した。

「や、堅書君は彼女いたよ」

瞬間、みんなの笑い声が止まつた。眼鏡君は淡々と真顔で、でも自信ありげに続けた。

「ていうか、いる。たぶん今でも普通につきあつてると思う」

(二)

「え？ 堅書君て彼女いるんだ!? あはは、まさかの展開！ 面白すぎ！」

「なんだと……。堅書でさえ彼女がいるのに、俺は、俺は……」

再び大爆笑する女子二人とうなだれる男子一人を無視して、

「えマジで？ それってどんな人？」

とわたしはやや食い気味に尋ねる。あんな協調性ゼロ、コミュ障の塊みたいな人間に彼女さんがいるなんてびっくりで、単純に好奇心がうずいた。

「僕も会ったことはないけど……。だいぶ前だけど写真見せてもらつたら普通に美人だつた。なんかハーフツインテール？ ていうのかな？」

髪が

眼鏡君はジョッキを置いて、両耳の上あたりで髪を軽く束ねるような仕草をしてみせる。

「え、ヤツバ！ 何それ二次元？ あ、Vカノ？」

「や、普通にリアル。^{けいと}京斗大生って言つてた。学部は違うっぽいけど、同じ三回生らしいよ」

「マジかー！ てか、うちの大学でハーフツインて何者!?」

「あ、あと高一からずつとつきあつてるって言つててびびつた」

「高一！ 足かけ六年じゃん！ どんだけ！ すご！ すごすぎなんだけど！」

昼に会つた堅書君とギャップがありすぎて、イメージが音を立てて崩れていく。

「テンションたつか」

「ハーフツインのリアル彼女だとお……。くそつ、あいつ、前世でどんな善行を積んだつてんだよ……！」

「あんたＶカノと添い遂げるんじやなかつたつけ」

あの堅書君も、普通に恋バナなんてするんだ。なんか意外。ていうか、昔は別に「普通の人」だつたって話だつたつけ。だとしたら、何かあつたんかな。普通の人が豹変しちゃうような出来事が。それこそ、その彼女さんに振られちやつたとか。

「ていうかさ、ほんとに今でもつきあつてるんかな？ 急に振られて、落ち込みまくつてんのかもよ？」と直球で尋ねてみる。

「少なくとも、先月の時点では、週一で会つてるとは言つてた」

「そっかー」

「彼女、本屋でバイトしてるらしくてさ、あいつ、サイン本取り置きしてもらつたとかな

んとか」

「ウケる。なにげにちやつかりしてんなー。てか結構堅書君としゃべってんだね」

「うん。あいつ話振ると結構しやべるよ。……それに、堅書君が何かおかしくなったのつて、二回生の後期くらいからなんだよね。でも彼女とは今でも普通に続いてるっぽい。だから、なんとなくだけど、彼女は関係ないんだと思う」

会話をどうつなげたらいいかわからず、五人とも黙つてしまつた。

「まあ、倦怠期とかかもしんないよね。そんだけ長くつきあつてるとさ——」

絞りきつたレモン汁をサワーのグラスに注いで、あたしはわかつたような口をきく。ほんとは何もわかつてないし、言つてから自分でも意味不明な返しだなつて思う。それにしても、二回生の後期つて何かあつたつけ、つて考えてみたけど心当たりは全然ない。

小動物ちゃんがカルーアミルクをマドラーでくるくるかき混ぜながら、

「おかしくなつた、つて、メンタルとかかな……」と深刻そうな声で言う。さつきまで本人が聞いたらメンタルやられそうな誹謗中傷連発してたのあんたでしょ、と心の中でそつと突つ込みを入れる。

「あ、いや、あいつ、別にメンタルとかはないと思うよ。ちよつと言ひ過ぎだつたかも。

悪かった」

眼鏡君があわてて言い直す。

「そうだな、ええと、おかしくなつたつていうより……うーん、なんだろうな、余裕がなくなつたつていうのかな。必死感ていうか。受験生の十二月みたいな感じ?」

「ああー……」

大学受験は一応あたしたちの共通体験だったから、眼鏡君のその一言でみんな妙に納得した。そつか、ああいう感じか。でも、何なんだろうな? まさかここまで来て仮面浪人なわけないし。

「なんだろ、就活?」

「えー、そもそも就活ならまずコミュ力上げろよって思わん?」

「だよねー。私達だつてさ、バイトとかインターンとか死ぬほど入つてるけど、演習もちゃんとやつてきたいからこういう会を設けてんのにさ」

「院試だつて、まだ一年以上あるしな。いや、むしろ今年が遊ぶ最後のチャンスなんだよな……。人生最後の夏休み、か……。くつ……」

またもや謎にくづおれでいる変Tの横でぼそっと眼鏡君が放った一言が、今日の飲み会

で一番のハイライトだつたかもしれない。

「なんかあいつさ、もう研究室に入つてんだよね」

「ええー！？」

「マジ?」

「はあ?
なんで!?

「ちょ、研究室配属つて四回生からじやないの？」

うちの学部は四回生になると研究室に配属されて、一年かけて卒業論文を書くことになっている。だいたいの研究室は今あたしたちがいる吉田キャンパスから遠く離れた桂キャンパスにあって、四回生と院生、教職員しかいない灰色の陸の孤島は、毎日がお祭りみたいな吉田とはあまりに別世界っていう印象があつた。

「じゃあ堅書君って、桂に通つてるってこと?」

「そうらしい。あいつ講義終わるといつも桂バスで速攻あつちに帰るんだよ」
だから、演習のあとすぐに消えてたのか。

「てことは、家も桂？」

「うん、元々実家住みだつたらしいんだけど、なんか最近、桂で一人暮らし始めたって」

「氣イ早すぎ！ 私なんかむしろ一秒でも長く吉田にとどまりたいんだけど
それはあたしも同感で、来年四月から『島流し』にあうことを考えると、正直ちょつと
憂鬱だつた。」

「だいたい、三回生で研究室つて、制度的にアリなの？」

「どうなんだろ。正式な配属じやなくて、ただ出入りさせてもらつてるつてだけなんじや
ね？」

「かもしだれないな。せんこ千古研らしいんだけど、あの先生よく『気軽に遊びにおいて』つて
言つてるし」

「あー、それ、めっちゃ言つてそう」

千古先生は、奇人変人が多いうちの学科の教授陣の中でもとびきり変わつてて、講義も
カオスすぎて何言つてるのかわからなかつたけど、とにかく楽しそうにやりたい放題やつ
てる先生だつた。もつとも、本人は普段はあまり桂にも吉田にもいならしくて、御所の
近くにメインオフィスがあるんだつて言つてた気がする。

「いや、でもさ、遊びに行つてるつてレベルじやなくない？ 引つ越しまでしてんで
しょ？」

「やっぱ堅書、あいつおかしいわ。普通じゃねーわ。大丈夫なのかよ……」「私は千古研つて聞いてなんか納得。あの研究室にはマッドな人間が吸い寄せられる何かがあるんだろうねー」

結局、堅書君はやっぱり変だという結論で全会一致して、班の結束がちょっとぴり高まつた気がした。険悪な雰囲気もいつの間にか消えていた。

教室の堅書君の横顔をうつすら思い出す。どこか思い詰めたようなあの横顔を。

「マジで、堅書君つて何考えてんだろうね？　ま、うちら凡人にはわかんないんだろうけどさー」

変人の考へてることはわからない。今日の飲み会のそんな結論に満足しながら、あたしは大皿に最後まで残つてた『遠慮のかたまり』に遠慮なく箸を伸ばした。

(二)

話をしてもみると、確かに堅書君は思つたほど取つつきにくいやツじやなかつた。口数は少ないし、ちょっとキヨドつてゐるけど、最低限の世間話くらいには乗つてくれる。ただ、

いつまでも「ですます」口調を崩さないのでハデ子がキレイで「ですます禁止！」使つたら罰金五百円ね！」と宣言してからは、班のメンバー内ではタメ口で話してくれるようになつて、少しほは馴染んできたかなと思う。あたしは別にどっちでもいいんだけど。

堅書君の彼女の話は、あの飲み会の翌日の休み時間にしつかりイジられた。

「堅書い、お前さ、何抜け駆けして彼女作つてんだよ！俺にも写真見せてくれよお！」
変Tは今日もまた別の変なTシャツを着ていて。抜け駆けも何も、変Tと出会う三年も前から堅書君は彼女さんとつきあつてゐるんだから、言いがかりつてレベルを超えていてきなり特大の理不尽をぶつけられて怪訝な顔をしてる堅書君に、眼鏡君がバツの悪そ
うな表情で、

「ごめん、昨日の飲み会で堅書君の彼女の話になつてさ」

とフォローする。ハデ子と小動物ちゃんも「堅書君の彼女？ 見たい見たいー！」と寄つてくる。

「え、あ、その……」

「写真、見せて見せてーー！」

詰め寄られて堅書君も観念したのか、渋々スマホに一枚の写真を表示させた。場所は鴨川^{かも}の河川敷みたいに見える。意外にも露出度の高い服を着た長髪の女性が立っている。かなり大胆なショルダーカットに、ぴっちりしたショートパンツ。しかも服の中央にスリットがあるて、おへそが丸見えになつてゐる。ちょっとすごいな。こういうのが堅書君の趣味なんだろうか。

……が。

肝心の顔が、よく見えない。かなり引きで撮られてて、ポートレートというより風景写真の中にたまたま人が映り込んでる、って感じ。それに彼女さんも、やや顔をそむけ気味だ。髪も、ハーフツインなのかただのロングなのかよくわからない。スタイルもいいし、美人っぽいことは何となくわかるけど、たぶん街で会つても気づかないな、これ。

「これじゃ、顔わかんない？ もつとアップの写真ないわけ？」

「堅書君さあ、わざと解像度低い写真出してきたでしょ！ にしても服すつご」

「うおお、俺には見えるぞ！ ハーフツインの美少女が恥じらつてゐる姿が！ 泣きぼくろが神々しい！」

変T、どういう目をしてんの。そもそもこの粗い画像のどこにそんな情報量が含まれて

るつての。

これ以上の写真が出てこないようなので、あたしは質問タイムを開始する。

「エグいねー。うちの大学ってマジ? 何学部?」

「一瞬、間があつた。

「あ……。そ、総合人間学部^{うじんぶ}……」

「総人! 総人ねー。あー、うん、なるほどー……」

工学部のあたしにとつては文系とも理系ともつかない謎の学部なので、話をどう続けたらいいかわからない。

頼む、堅書、合コン設定してくれ! と一人懇願して変Tを無視して、方向転換する。

「高校の時からなんでしょ? すごいじやん。どういうきっかけ?」

「えつと……。僕と一緒に図書委員をやってて」

「へえ、堅書君、図書委員だったんだ! うんうん、いかにもやつてそう。休み時間とかいつも難しそうな本読んでるもんね」

「……」

堅書君は心なしか顔が赤くなつてるように見える。でも、照れてるのか、怒つてるの

か、戸惑つてゐるのか、よくわからない。

「ねえねえ、総人つて吉田南よしだみなみでしょ？ 大学内だいがくないでしょっちゅう会えるじゃん。いいなー。今日も会つたりした？」

割り込んできた小動物ちゃんは遠恋中なので、心底うらやましそうだ。

「いや……しばらく会つてない」

「しばらくつて……どのくらい？」

「ええと……四週間。いや五週間、かな……」

場の空気が変わった。

「はあ？」

「なんで！？ すぐそこでしょ！ 隣じyan！ なんで会わないので！」

「それ、やばくね？ 僕でもわかるわ」

「私だつて月イチで東京行つてんのに。大丈夫なのそれ？」

「堅書君さ、週一で会つてるって言つてなかつたつけ」

「ああ……あの頃はまだ会えてたんだけど、お互い最近忙しくて」

「……W.i.zは？ 最近送つてる？」

「送つてない……」

「ヤバいって。それマジで自然消滅コースだつて」

「えー、彼女のほうも反応ないなら、もう手遅れなんじやない？」

ダメじゃん、全然ダメじゃん、って思った。六年間も続いたことが奇跡なのかもしれない。というかもしかしたら、もうとつくに終わりを迎えてるのかも知れなかつた。

一氣にお通夜ムードになつたところで先生が入つてきて、話はそこで途切れた。演習が終わると堅書君はいつものようになつてから教室を出ていった。今から彼女さんに会いに行くとも思えない。例のバスで桂ヤンバスに帰つたんだろうな。

それ以来、堅書君の彼女さんの話はなんとなくタブーになつてしまつた。だつて、怖くて訊けないじゃん。あれからどうなつたの、なんてさ。

堅書君はその後もいつも通り、淡淡と講義や演習をこなしては、毎日バスで桂に帰つて行つた。課題やレポートは毎回ほぼ完璧で、あたしたち全員、何度助けられたかわからんない。でも、飲み会には何度も誘つても来てくれなかつたし、お昼ご飯もたいてい何かの専門書を読みながらぼつち飯してた。話を振ると一応答えてくれるけど、基本的に空き時間は

何かしら勉強したりコーディングしたり英語の論文を読んだりしてて、なんとなく話し掛けづらい雰囲気だった。しかも演習中の余つた時間にまで、何やら堂々と内職してた。先生やTAさんにもバレてたみたいだけど、課題はちゃんとこなしてるので黙認されてるつぽかった。

なんでそんなに猛勉強してるのか、ほんとに謎だった。聞いてもうまくはぐらかされた。だから、それ以上踏み込めなかつた。

一度、班のみんなで集まつて一緒に課題やろうぜって話になつたことがある。前期の終わり頃だつたかな、作業通話も何となく飽きてきたあたりだつたと思う。小動物ちゃんが「どうせなら桂キャンパスに行つてみない? そのほうが堅書君も誘いややすいし」とか言い出して、桂まで行くことになつた。まあ、それはただの口実で、なんとなく夏の遠足気分でみんなとわいわいチ遠出したかつただけだ。一応事前に、眼鏡君がWiZで堅書君に連絡したんだけど、全然既読がつかない。いつもそうだから、多分ほんとに読んでないんだと思う。だから、実質的にアポ無し突撃するしかなかつた。

変Tが誰かから聞き出してきた堅書君の下宿は桂キャンパスの真裏にあつた。いかにも昭和って感じの、今にも倒れそうな安アパート。住所間違えてんじゃねつて言い合いながら部屋のドアをノックすると、ほんとに堅書君が出てきて、眼鏡君ですらびっくりしてた。だけど堅書君はあたしたちの誘いを迷惑そくに速攻断つて、部屋に引っ込んでしまつた。しようがなく、あいつやっぱ変わり者だとか口々に言いながら、五人で桂キャンパスの図書館に行つてそこで課題をやつたり、隣の建物の学生食堂で夕飯を食べてみたりした。でも、みんなだんだん口数が少なくなつていつた。四回生になつたら毎日こんな生活になるのかつてどんよりしてたのはきっと、あたしだけじやなかつたんだと思う。しかも吉田までの連絡バスが結構早い時間になくなることを誰も知らなくて、結局普通のバスやら阪急^{きゅう}やらを乗り継いで帰らなきやいけなくなつて、散々な目にあつた。

あの日、堅書君のアパートの廊下で見た、海の家みたいなちつちやい共同シャワー、扇風機の熱風の奥に見えた殺風景な部屋、人の気配のしない要塞みたいなキャンパス、強烈な日差しと草いきれの匂い、食堂で黙々と食べたチキンカツ、帰りのバス停から見上げた生ぬるい月。それらは一夜の夢みたいに、あたしの記憶の中に強烈に残り続けた。

まさか翌年、あの安アパートにしょっちゅう通う用事ができるなんて、当時は予想もしてなかつた。

そのきっかけを作ってくれたのが、ヤタだつたんだ。

第二章 2033年 夏

(一)

「堅書君つ。やつほ」

ギシギシと軋む安アパートの廊下を歩いていくと、珍しく共同キッチンの前で堅書君と鉢合わせした。

「……何の用」

暑さのせいもあるのか、堅書君は少し不機嫌そうだ。ていうか、この前よりもさらにやつれてるみたいに見える。

「何の用つて、ヤタのワクチン！ もう四週間経つたでしょ？ 堅書君、忙しくて忘れてんじゃないかなって」

小脇に抱えてきた折畳みの猫用キャリーを持ち上げてみせる。

「……ああ、もう四週間か」

「ほらあ、やつぱ忘れてる！ 堅書君、W i Zも読んでくれないしさー。来ちゃつた方が早いし」

ヤタっていうのは、三月に堅書君が飼い始めた子猫だ。真っ黒で、ちつちやくて、子猫にしてはすごくおとなしくて、そんでもつてめっちゃ可愛くて、会うたんびにぐんぐん大きくなつてから会いに來るのが楽しいんだよね。堅書君てば、猫の飼い方も知らないのにヤタを拾ってきて死なせかけて、たまたま実習の忘れ物を届けに來たあたしが見つけて速攻お医者さんに連れてつて、その後もつきつきりであたしが一緒に世話をしたから助かつたんであつて、あたしはヤタの命の恩人なのに、まるで感謝してもらえてない。その後の育て方も危なつかしいから、こうして時々様子を見に來てる。

名前は堅書君がつけた。子猫用ミルクを数時間おきに飲ませ続けて数日すると、荒れて

いた毛並みもすっかり良くなつて、カラスの濡れ羽色つていうのかな、真つ黒で艶やかになつて、「つやつやになつたね！ カラスみたい」つてあたしが言つたら堅書君が「名前決めた。ヤタにしよう」つて。ヤタガラスのヤタなんだつて。なんか、導きの神様なんだつて言つてた。

ヤタの面倒をしょっちゅう見に来れるのも、四回生になつてあたしも桂に引っ越したから。去年だつたら無理ゲーだつたなー。あたしは堅書君とは別の、データサイエンス系の研究室に入つて、今は卒業研究と院試の勉強を同時並行で進めてる。講義や演習はほとんどなくなつて、基本的に研究室が居場所になるから、学科のみんなでつるむ機会もすっかりなくなつちやつた。桂での学生生活は思つたほど悪くはなかつたし、研究はそこそこ楽しい。だけど、吉田でのバカ騒ぎが時々無性に懐かしくなつたりもする。

見ると堅書君は、ちょうど瞬間湯沸かし器から両手鍋にお湯を張つてることだつた。部屋のシンクは水しか出ないらしいから、光熱費の節約の一環なんだろうな。お湯の溜まつた鍋を両手で持ち上げて、狭い廊下を歩いていく堅書君の横から、覗き込むようにして話しへける。

「なになにー？ 何か作んの？」

堅書君はすぐには答えずに、ちょっとウザそうな顔をする。そのまま開けっぱなしの部屋に戻ると、ドア脇の一口コンロに鍋を置いて点火し、換気扇の紐を引っ張った。

「ああ、これ。まとめて茹でようかと」

コンロ下の戸棚から出してきたのは、パスタの袋だ。

「お、パスタ？ パスタじゃん！ ほおー、堅書君パスタ作るんだ！ いいじゃん。何味？ カルボナーラ？ ジエノベーゼ？ マンマミーア？ ランボルギーニ？」

「塩味」

「ちよつとさあ、ツツコミくらい入れてよ！ ……って、え？ いやいや塩味って！ 当たり前じやん、塩で茹でるんだから！ ていうか何でボケにボケで返すかなー」

「いや、だから味付けが塩で」

「はあ!? 塩オonly? 素パスタ? 素うどん的な? 副菜もなし?」

見るとコンロの脇には確かにお皿と塩とお箸しかない。その瞬間、今日もあたしは吼えてしまった。

「何考えてんの！ どんだけ極貧生活してんの！ 死んじやうよ！ 待つてて今パスタ

ソース買つてくるから！ 逃げないでよ！」

扇風機の回る音が部屋に響いている。半開きのドアからは、蒸した空気が廊下に流れ出している。堅書君は畳に座つて、あたしは三和土たたきで猫用折畳みキャリーにそっと腰掛けて、割箸でパスタを食べる。トマトソースとソーセージと野菜で超適当ナポリタン。チーズ入り。共同キッチンの三口コンロで、ちゃんとフライパンで炒めて作つたやつ。他にも野菜ジユースとか、レトルトカレーとか、サバ缶とか、常温保存できて栄養がありそうな物もいろいろ買つてきた。パスタのアレンジにも使えるしね。あと、勝手にお相伴させてもらつたぶん、パスタの追加ストックと、ヤタのフレード。

「マジで毎日三食、塩パスタだつたの？」

「ああ。塩だけって、けつこう旨いんだ」

「そういう問題じやないでしょ！ ……壊血病になるよ。ほら、昔、船乗りとかがなつてたやつ。堅書君が倒れたらさ、ヤタはどうなんの」

「……」

「猫を飼うつてのはさ、そういうことにも責任を持つことだかんね」

「……そうだな。ありがとう」

あたしが今いる三和土と、ヤタや堅書君のいる六畳間とは、上がり框かまちで隔たれてる。土足で入れるここまでではあたしも立ち入らせてもらつてるけど、それはあくまでヤタのお世話のためだ。靴を脱いで上がつたりはしない。別に疑つてるとかじやなくて、『彼女持ち』の男性の部屋にすかずかと上るのはちょっと違うかなって思つてるから。

ていうか、彼女さんと今どうなつてゐるのか、あれから訊けてない。でも、はつきりしないうちはここまでしか入らないって、自分の中で決めてるんだ。そんなこと口には出さないし、堅書君も何も言わない。奥行き数十センチのこの空間は自然発生的に生まれた、あたしたちの奇妙な緩衝地帯だ。

「んー、美味しかつたっしょ！ やつぱ夏はトマトだねー」

食べ終わつて横を見ると、堅書君も空になつたお皿を畳の上に置いて、壁にもたれかかつている。ま、さすがに洗い物くらいは自分でやつてよね、と思ひながらお皿に目をやる。……あれ。何か残つてる。

違和感の正体は、きれいに除けられた輪切りのピーマンだった。

「あー！ ちょっと！ 何ピーマンだけ残してんの！ お子様じゃん！」

「うつ……その……」

「全部食べないと、買ってきた物全部持つて帰るから！」

嫌そうにピーマンを口に入れてすぐに水で流し込む堅書君に呆れつつも、意外な一面を見た気がして何だか笑ってしまう。

「ふふっ……。あははははっ」

「お子様で悪かったな」

「ほんつとお子様だよ。ヤタもあきれてるってさ。ねえヤタ、お前のご主人様はなんでこんなお子ちゃまなんだろうねえ」

手を伸ばして、ヤタの耳の付け根をこちよこちよする。ヤタは小さく鳴いてあたしの足元にごろんと寝そべる。

「でもさ、ピーマンが苦手でも、パプリカならいけるんじやないかな？ あれなら苦くな

いしさ。彩りもきれいだし」

すると堅書君が軽く鼻で笑つた。

「何笑つてんの！ 笑うとこじやないでしょ！」

「あ、いや、ごめん。その、つい最近まったく同じことを言われたから……」「え？ 誰に？」

思わず反射的に訊いてしまった。

「う……、かつ、彼女に……」

あ……。

彼女さんと、ちゃんと続いてたんだ。

そつか、そうだよね。六年もつきあつてるんだもんね。そう簡単には別れないよね。
まつたくもう、心配させないでよ。安心したけど……なんだろう、そうならそうと早く
言つてよ。

上がり框の段差が、とても高く見えた。やっぱり、ここから先には立ち入らない。調子
に乗つちゃいけない。

「あはは、彼女さんにまで心配されてんの!? 彼女さん、気の毒すぎるわー。ていうか元
気なの？ ちゃんと連絡取つてんの？」

「ああ、先月久しぶりに、彼女のバイト帰りに少し会えたんだ。連絡はなかなかできていけど」

「先月!? ダメじやん！ やっぱダメじやん！ むしろあたしのほうが会つてんじやん。
いえーい、勝ったね」

「かもしれない」

「ちょっと！ 何認めてんの！ 知らないよー？ このまま勝ち進んじゃうよ？」自分で

もなんかテンションおかしい。言つてることと思つてることがバラバラだ。

「いや……、僕だって好きこのんで彼女を放置してゐわけじゃない。一時たりとも忘れた
ことはない」

ほらね。だから調子に乗るなつづーの。そりやそうだよね。なんだかんだ言つても、恋
人だもんね。

でも。

だとしたら。だとしたらさ。

「——じゃあ、なんで？」

言つてしまつた。ずっと訊きたかった、だけど心の奥底に押し込んでいた問いが、ふつ

ふつと湧き上がつてくる。堅書君に突きつけるなら、今しかない、と思う。訊けばきっと、少しさは楽になれる気がする。

「忙しい忙しいって、何がそんなに忙しいの？」

そんなに恋人のこと放置してたら、つきあつてゐる意味、全然ないじやん。毎日イチャイチャしてゐるほうが、まだ納得できる。もういつそのこと、別れた方が良くない？ なんて思つてしまふ。でも、きっとそれは無意味だ。だつて、恋人すらなかなか会わせてもらえないのに、あたしなんかが近寄れるわけがないよね。

わからない。堅書君が、わからない。

「彼女さんもヤタもほつたらかしにして、学科の行事や飲み会も全部すっぽかして、食事だつてこんなに切り詰めて、はやばやと研究室に入つちやつて、休み時間もずっとベンキヨしててさ」

学科のみんなもあたしも、どんだけ堅書君のこと心配してると思つてんの。

「院試だつて願書出さなかつたんでしょ。あたし、てつきり千古研にそのまま進むんだと思つてた。だから猛勉強してゐのかなつて思つてた」

あ、ダメだ、なんか止まらなくなつてる。自分の声が震えている。

「ねえ、堅書君はさ」

気がついたら立ち上がっていた。ヤタの真ん丸な目がこちらを見上げている。

「そこまで自分を追い詰めて、大学生活全部放り投げて、何をしようとしてるの」

堅書君は一瞬ひるんだように見えたけれど、ゆっくりと口を開いた。

その返事は、全然、答えになつていなかつた。

「……どうしても、会つてお札を言いたい人がいるんだ」

話がまるで見えない。

「え……。どういう意味。それって誰」

バカみたいな返事しかできない。頭の回転が速すぎる人つて論理が数段飛ぶっていうけど、これがそれなのかな。

「僕はその人を常に『先生』と呼んでいた」

遠いどこかを見つめながら、ぽつりと堅書君がつぶやいた。その表情は、なんだか不思議と、高校生くらいの男の子に見えた。

(一一)

「先生？……高校の先生とか？」

話が飛びすぎてついていけない。でもなんか、この話はちゃんと聞かなきやダメな気がした。そう思えるくらい、堅書君はなぜか無防備に見えた。いつも周りに張り巡らされた見えない防護壁が、今は全然感じられなかつた。

「いや、違う。別に教師だつたわけじゃない」

私は再び三和土にしゃがみこんで、ヤタのおなかをそつと撫でながら堅書君の話に耳を傾ける。

毛並みと体温を手のひらに感じるうちに、さつきまでの荒ぶつた気持ちが少しずつ落ち着いてくる。必死こいてた自分が、今さらながら少し恥ずかしくなつてくる。

「だけど、なんていうかな……。『先生』としか呼びようがないんだ。その人の記憶を呼び起こすことに、すぐ『先生』と言いたくなる」

「ふうん……？ よくわかんないけど、大切な人だつたんだろうなつてことはわかるよ」「ああ。彼女と出会えたのも先生のおかげだ。本当に、いろいろなことを教えてくれたん

だ。何もできなかつた僕に、やればできるということを教えてくれた。周囲に流されればかりだつた僕を成長させてくれた。大切な人を守るための強さをくれた。今でも苦しいとき、悩んでいるとき、僕は先生の言葉を思い出す」

「一言一言、慈しむように堅書君は言葉を紡いでいく。いつもの寡黙な堅書君とは別人みたいで、その静かな熱量にあたしは少し驚く。

「——だけど先生は、僕の前から消えてしまつたんだ。いや、僕が消してしまつた。この手で」

話がどんどん意味不明になつていくけど、その口調は真剣そのものだ。

「あの時はそうするしかなかつたと頭では理解できても、それがずっと心の重しになつていた。なぜ先生は消えなければならなかつたのか。消えるのが僕ではいけなかつたのか。あんな形で先生を踏み台にして、僕だけが幸せになつてしまつていいのだろうか、そう思つていた」

あたしに説明するというより、なんだか自分に言い聞かせてるみたいに聞こえる。何か、辛い思い出があるらしいことだけは伝わってきた。そして堅書君がそれに対して、ずっとある種の罪悪感を抱いていることも。ふと、サバイバーズ・ギルト、という言葉を思い出

す。生き残った者が感じる罪の意識。自分が幸せになつてはいけないと思つてしまふ気持ち。

「だけど、二回生の時にわかつたんだ。先生は消えたわけじやなかつた。どこかの世界に、確かにいるのだ、と。その情況証拠を僕は掴んだと思つてゐる。だから僕はそれを確かめたい。もう一度先生に会いたい。もう一度だけでいい。会つてお礼を言ひたい。もしかすると生きているうちには無理かもしれないけど、それでも僕は、先生のいる世界に手を伸ばしたい。その可能性に賭けようと決めた」

先生にもう一度会うことで堅書君が過去の呪縛から解き放たれるのなら、あたしは全力でそれを応援したいって思つた。堅書君は優しいから、たとえこの先どれだけ幸せな人生を送らうとも、心のどこかで先生に対する罪悪感を持ち続けてしまうんだろうな。サバイバーズ・ギルトは解消されなきやいけない。そのためだつて言うのなら、学生生活のすべてを犠牲にしようとする堅書君の奇行も、少し許せる気がした。堅書君は、幸せにならなきやいけない。

「そつか。堅書君はどうしても先生に会いたいんだね。うん、応援する。何かできることがあれば、手伝うよ」

「……ありがとう。今日もこんなに助けてもらって、感謝している」

堅書君は、思いを吐き出したせいか、どこかほっとしてるようにも見えた。

「でさ、先生に会うことと、堅書君の猛勉強と、どんな関係があんの？」

「うーん。どう説明すればいいかな。……僕は、京都歴史記録事業センターの職員になりたいと思っている」

「京都歴史……？」

「千古さんの講義を受けてるなら、アルタラセンターと言ったほうが通じるかな」

「あ、講義で聞いた！ 量子記憶装置とか、クロニクル京都とかでしょ」

「そう、それ。歴史記録事業センターの中でも特に量子記憶装置^{アルタラ}の管制を専門に司る部門。そこを目指している」

アルタラセンター。確かに、京斗大とプルーラ社と京都市だか京都府だかでやつて、産学官の共同事業の母体。アルタラっていうでつかい球体の写真は見たことがある。千古先生はそのセンター長を兼務していて、吉田や桂にほとんどいないのも、センターにはほぼ住んでるからって言つてた。

そこに、堅書君の先生がいるつてことなんだろうか。

「アルタラセンターフてさ、そんなに勉強しないと入れないと入れないの？ 普通の就活じゃダメなんだ？」

「研究機関だし、国際事業の一翼でもあるからね。普通は学部卒では入れない。職種にもよるけど、複数の高度技術試験に合格しなければならない」

「ほえー。そんなに大変なんだ。千古研のコネがあつても無理なの？」

「千古研に在籍しているだけで入れるなら、僕だつてこんなに苦労はしていない。センターにいる千古研出身者は数人だけだ。しかも千古研で博士号を取つてもエンジニア採用ではたいして重要視されない」

ふう、と一度ため息を吐いてから、堅書君は熱っぽく語り続ける。

「院生として千古研に入ったところで、直接アルタラを触らせてはもらえない。所詮、学生の立場だから、アルタラのビッグデータを間接的に扱う研究がせいぜいだ。アカデミックな研究としては興味深いけど、僕が目指すのはそこじゃない。だいたい千古さん自身、全然桂にいないしね」

「じゃあ、なんで三回生から千古研に入つてたわけ？ 千古研に行つても無駄っていう話に聞こえたけど」

「正確には二回生の終わりから出入りしてた」

「はっや！」

「学部のうちに基礎知識として、千古研で博士号を取得するのと同等の知見とスキルは一応持つておきたかったんだ。桂なんかで五年間もモタモタしてられないし。それに、まあ吉田にいるよりは現場の生の情報も入りやすかつたからね」さすがにちょっと引いた。やっぱ、頭おかしい。

「ええー……。普通に学部の勉強やりながら、そんなことしてたの!?」

「まあ、ほら、うちの大学、単位が空から降つてくるって言うし。それと般教^{パンキヨ}の自然群あたりは高一の頃にひとつおり即席で詰め込んでたから」

「高一で!? なんで!?」

「ええと、なんていうか……ちょっと特訓的なことをやってて、先生と」

「先生と、特訓……!?」

「主に物理や化学と、そのための数学くらいだけど」

「ヤツバ……」

高一で大学レベルの特訓って何。堅書君の先生とやらも、相当危ない人っぽい気がする。

それにしても、堅書君が早い段階から桂キャンパスに通つてたのは桂に身を捧げるためなのかと思つてたけど、むしろ逆だつた。桂での院生生活五年間を早回しすることで、桂から早く去るためだつたんだ。あれほどストイックな堅書君でさえ桂キャンパスを出たがつてたなんて、何か笑つちやつた。

「だから堅書君、院試受けないのかー。アルタラセンター一本勝負なんだ」

「ああ。これに賭けてる」

大博打だなあという気もするけど、やりたいことを追いかける姿はちょっとうらやましいなつて思つた。あたしは、なんとなくまだ就職したくなくて大学院を考えてるだけだし、修士課程を出た先で自分が何をやりたいのかも見えてない。

「てことは、アルタラセンターにその先生がいて、一緒に働きたいってこと? でもさ、お礼を言うだけなら、普通に千古先生にでも頼んでみたら会わせてくれたりしないんかな」

「うーん……。今のセンターにはいない、というべきかな。まあ、アルタラセンター自体は足がかりにすぎない」

あれ、先生つて、センターの人じやないんだ。海外のこの分野の権威とかなのかな。セ

ンターの人脈を伝手に、何とか接点を作ろうとしてるとか？

「それと、千古さんに頼んでも会えるわけでもない。というより千古さんには先生の話は一切していいない」

「え、なんで!? 千古研の先輩とか、センターの人にも？ ええと、あと何てつたつけ、助教の女人人」

「徐さんかな。話してない。千古研やセンターの人達も知らないと思う」

意味がわからなかつた。こういう時つて、普通は同じ分野の人に相談してみるもんだよね。なのに、なぜか堅書君は一人で全部やろうとしてる。

一瞬、ぞくりとした。

この人は、堅書君は、あの千古先生の研究のさらに先に行こうとしてるのかもしれない。何か、とんでもないことをやってやろうとしてるのかもしれない。

なんていうか、もうそれは、あたしなんかが聞いたときつと理解できるわけないんだろうな、つて気がした。

堅書君はアルタラセンターに入つて、そんでなんか頑張つて、先生に会う。あたしがわかつたのはそれだけだ。まあ、危ない話とかじやなくて少しほつとしたけど。

あ、でも。

この話を知る権利がある人が、まだもう一人いる。堅書君の密かな野望のせいであつちや苦労させられてるらしい人が。

「じゃあさ、彼女さんは……？」

背中を汗がつたうのを感じた。

「彼女さんは知ってるの？ 堅書君が何のためにこんなに苦労してるのか」

「ええと……。アルタラセンターに入りたいってこと、それまでの数年間、勉強に専念させてほしいということは伝えてる。彼女もそれを認めてくれて、僕の好きなようにやらせてくれている。だけど、その目的が先生との再会だということは、たぶん知らないと思う」

「そなんだ……」

さすがに、何も知らされずに放置つてわけじゃなかつた。納得もしてくれてるんなら、うん、まあ……良かつた、んだろうな。

でも、先生のこと、恋人にも話してないんだね。ひよつとして、ひよつとするところ、堅書君の他は、あたししか知らないってことなんだろうか。

「先生の話、あたし聞いたやつて良かつたんかな」

「ヤタのことでこれだけ世話になつてるし、専門的な話も通じるから、まあ訊かれたら話してもいいかなと思つて。僕自身の問題だから、基本的には他言しないつもりだけど」

「……ん、そつか」

千古先生も恋人も知らない、ささやかな秘密だ。

「ふふ、じゃ、あたしもみんなには黙つてるね」

その時、ヤタが小さく鳴いた。

「そっか、ヤタもだね。この話は、堅書君とあたしとヤタだけの秘密。ヤタ、人に言つちやダメだかんねー」

ヤタはすりすりとあたしのサンダルの先に甘えてくる。甘えるのは子猫の特権だ。

片手でヤタをあやしながらあたしは、このまま堅書君が恋人を放置して勉強を続けてくれても別にいいんだよつて思つちゃつてるのに気づく。こんな風に、時々ヤタのお世話をしながら、ただ堅書君と他愛のない話をする。そんな日常がずっと続いてくれればいいなつて。

だけどそれって、堅書君の人生にとつて、いいことなんだろうか、とも思う。

やりたいことがあるのはわかつた。幸せになつていいんだと堅書君が心の底から思えるためなら、その夢は絶対に叶えるべきだと思った。だけど、そのため恋人と会うのも我慢して、毎日不健康な食生活して、一分一秒も惜しんで貴重な大学生活を勉強に捧げるのつて、どうなんだろうか。

将来の大きな夢と、日常の小さな幸せ。

あたしの中では、二つの矛盾した感情がぐるぐるせめぎあつていて。

「でもさ」

少し考えて、やつと口にした。

「先生に会いたいのはわかつたけどさ、堅書君は無理しそぎなんだよ」

本と机とPCしかない部屋を見回しながら続ける。

「こんな生活してたらマジ死んじゃうつて。勉強しながらでも、もうちょっとこう、大学

生らしい楽しみとか、生活の彩りとかさ。就職しちゃうならなおさらだよ」

「そんな器用なことはできないよ。僕は要領が良くないから、一分一秒でも愚直に頑張るしかないんだ」

「堅書君てさ。……わりとドMだよね」

堅書君は少し考え込んだ後、急に何かに気づいたみたいな顔をして、こんなことを言つた。

「思つたんだけど、僕の先生もまた、自らの目標のために他のすべてを犠牲にしてきたんだ。時間も健康も人間関係も全部切り捨てて、十年もの歳月をただひたすら目標遂行だけに捧げてきた。……もしかすると、先生を追いかけるあまり、知らないうちに僕の生き方もそれに縛られてしまつてのかなって」

それを聞いてさすがに、バカかなつて思つた。ベンキヨしすぎて、バカになつちゃつたのかなつて。だから思わず言つちゃつた。

「は？ バカじやないの!? いくら恩師だつて、所詮、他人じやん」

露骨にムツとする堅書君。他人じやないんだよつて顔をしてる。結構、考えてることがそのまんま顔に出るんだよね。うん、まあ、ちょっと言い過ぎたかな。ごめん。

もしかしたらそれは、堅書君なりの、サバイバーズ・ギルトに対する不器用な償いなのかもしれないなかつた。あえて先生と同じ苦労を背負い込むことで、少しでも不公平さを埋めようとする、無意識の行動なのかも知れない。

だけど、やっぱりそれは間違つてゐる、つて思つた。堅書君がそこに負い目を感じる必要なんて、全然ない。

「いや、まあ、なんつーかさ、先生は先生の人生、堅書君は堅書君の人生があつてさ、それつてまるつきり別物なわけじゃん」

他人の人生をなぞつたつてしようがない。堅書君は自分の人生をちゃんと生きて、それで堂々と先生に会いに行けばいい。

堅書君は何か反論したそうにも見えたけど、黙りこくつて何やら考へてゐる。

「それに先生だつてそんなこと堅書君に望んでないと思うよ。先生がどんだけ苦労したかしんないけどさ、教え子にもそれを体験させようなんて、負の連鎖だよ」

「…………」

「だから、堅書君が先生に憧れる気持ちはわかるけどさ、それに人生を束縛されちゃダメだよ。そこまで生き急がなくたつて、先生だつてきっと待つてくれるよ」

「……そうか」

「もつとさ、大学生らしいこともやりなよ。今日みたくダラダラおしゃべりする日があつたつていいじやん。ヤタのことも堅書君のことも、いつでも力になるからさ」

「そうだな。ありがとう」

「彼女さんともたまには遊びに行つたりしてあげなよ」

調子に乗つて、さつきまでは思つてもみなかつたことを言つてみたりする。でも今はなんだか素直にそう思えた。堅書君には、普通の大学生の楽しみをちゃんと知つておいてほしいつて思った。

だつてさ、あたしたち。

もう、四回生なんだよ。

「そんじや、ヤタ、そろそろ獣医さんのところに行こつか。あんまり遅くならないほうがいいし、お前のご主人様は今日も留守番して猛勉強だからねー」

立ち上がりつて、猫用キャリーを組み立てる。

「ほら、ヤタ、入んなー」

ヤタはどうしてもキャリーに入つてくれない。お気に入りのタオルを中に敷いてもダメ。抱えて入れようとしても、キャリーの入り口に足をかけて踏ん張つて、手の間からすると逃げちゃう。せつかくわざわざ実家から持ってきてよく洗ったのに。うちのフクちゃん

んの匂いがついたやつてるか。んー、しようがないなあ。抱え上げて、いつもの段ボール箱にひよいと入れると、大人しく丸くなつた。

すっかりカピカピになつたお皿を重ねながら、堅書君が「今日はありがとう。助かつた」なんて殊勝なことを言つた。

「ほんつと感謝してよね。これは貸し！ 堅書君がアルタラセンターに入つたら一万倍にして返してもらうつてことで！」

動物病院の診察券とワクチン接種代を堅書君から預かると、段ボール箱を両手で抱えて廊下に出た。極貧生活を見かねて、ワクチン接種代も出世払いでいいよつて言つたけど、堅書君は自分が払うと言つて頑として譲らなかつた。自分は塩パスタなのに、ヤタには結構いいフレードをあげてるしさ。そういうところだよね。

でもまあ、ともかく、まだまだヤタのことは堅書君に任せつきりにはなれない。今後さらに忙しくなるだろうし、やっぱり時々はここに様子を見に来る必要があるよね。当面はあたしがいなくちやきつとダメだ。

廊下を歩きながら、段ボール箱の重みに愛おしさを感じる。ヤタが導きの神様つてのは本当なんだなあつてほんやりと思つた。こんなに長く堅書君と話したのは初めてのこと

だつたし、あたしは堅書君のことをすっかりわかつた気になつていた。
だけど、堅書君は一番大事なことをずっと隠していた。それを知つたのは、卒業を間近
に控えたある冬晴れの日のことだつた。

第三章 2034年 冬

(一)

「じゃあね、ヤタ。明日までいい子でお留守番するんだよ」

今日も安アパートのドアをパタンと閉めて、冷え切つた廊下に出る。

堅書君は、猛勉強の理由を打ち明けてくれて以来、たまに研究室に泊まり込むときヤタ
の世話をあたしに頼むようになつた。近くに住んでて猫の世話も慣れてて堅書君の事情も
知つてて、頼みを断れないつてわかつてるから。洗いざらい話してくれたのはそれが理由
か。ほんつとあいつ策士すぎ。完全にあたし、都合のいい女じやん。でもまあ、アルタ

ラセンターの最終入所試験の結果も来月にはわかるらしいし、あたしも卒論をやつと出し終えて一息ついたし、何より二月のこんな寒い日にヤタを放つておけなかつた。フードと水を用意して、ブランケットの他にタオルでくるんだ湯たんぽも置いてきたから、きっと大丈夫。

鍵なんて誰もかけてない不用心なアパートの廊下は静まりかえつて、ブーツ越しでも底冷えが伝わつてくる。早くここから出ようと思った瞬間、急に廊下の奥に外の光が射しこんで、思わず目を細めた。

突き当たりにある表玄関が開いて、誰かが入つてこようとしてる。逆光で顔がよく見えない。だけど、シルエットは明らかに堅書君じやなかつた。

女性だ。

丈の長いコートに身を包んでいる。ストレートの黒髪の一部を、両サイドで結んでいる。ハーフツインテール。

——彼女さんだ。堅書君の。

初対面なのに、一発でわかつてしまつた。

ずんずんとこちらに近づいてきた彼女さんは、あたしの一メートル先で立ち止まつた。沈黙が流れる。彼女さんは軽く会釈すると、不機嫌そうにこちらを見据えて、静かに口を開いた。

「もしかして、堅書さんにご用でしようか」
逃げられない。観念するしかなかつた。

桂キヤンパスの一角にあるカフェテリア。この時間は人もまばらだ。Seleneといふ、月の名を冠したその食堂で、どういう風の吹き回しか、あたしと彼女さんは向き合つて座つている。

堅書君のアパートで堅書君の恋人と鉢合わせするなんて、最悪のシチュエーションだつた。堅書君の部屋から出てきたところは見られてないと信じたい。アパートの廊下であったは、自己紹介しながら必死に弁明した。自分は堅書君と同学科、同学年で、卒論関係の書類を届けに来ただけで、ノックしたけど不在だつたんだ、つて。前半は嘘は言つてない

けど、書類から先は完全な出任せだ。ならば、と彼女さんが部屋を開けようとしてくれるのを、これは本人に直接渡して説明しなきやいけないからとかなんとか言つて必死に阻止した。ヤタが出てきてあたしにすりすりして来たらおしまいだ。

その後は完全にテンパつてて、何を話したのか正直覚えてない。ただ、彼女さんは堅書君の部屋には結局向かわずに「貴方のことは、堅書さんから伺っています。どこかで少しお話を」なんてめちゃくちゃ怖いことを言い出して、それ以来お互に終始無言でこのカフェテリアまで来てしまつた。何。伺っていますって何。怖すぎなんですけど！

緊張しすぎて味がないチキンカツを口に運びながら、あたしはあらためて正面の女性をそれとなく観察する。

誰がどう見ても完璧な、正統派ヒロイン。前に見た写真はよくわからなかつたけど、実物を見るとなんかこう、オーラが違う。最低限のメイクなのに目鼻立ちは整つてて、文句なしに美人の部類。服装は……今日はまともだ。だぼつとしたアイボリーのニットに、茶系のロングスカート。普通だけど育ちの良さを感じるのは、やっぱりこのヒロイン顔のせいだろうな。それに比べたらあたしなんて完全に、どこにでもいるモブの造形。情けないくらいに。

だけどこの彼女さん、さつきから、にこりともしない。何を考えんのか全然読めない。寄らば斬るぞって感じの近寄りがたさを身にまといながら、ずっと押し黙つてきんぴらごぼうを食べている。怒つてるんだとしたら怖すぎるし、そうじやないにしても相当な変わり者なんじやないか、って気がする。堅書君がまともに思えてくるくらい変だ。ある意味、お似合いのカップルなのかもしれない。

居たたまれなくなつて、あたしから尋ねた。

「あの……お話つてのは、えつと」

「ああ、名前をまだお伝えしていませんでした。いちぎょう一行、瑠璃るりと言います。一行、二行の一行」

言葉遣いは丁寧だけど、なんていうのかな、予想外にドスの効いた、素っ気ないしゃべり方。相変わらず不機嫌そうな仏頂面のままだ。

「いちぎょう……さん」

「総人の四回生です」

知つてるとおりの情報だ。

「あ、はい。えつと、あたしはさつきも説明したとおり、工学部の四回生で、同学年だか

ら、タメ口で……いつかな」

「……いいですよ」

OKしつつ、自分は合わせないんだ。やっぱちょっと変わってるな。まあ、このままタメ口で行かせてもらうね。こっちも敬語だと完全にあたしが一行さんに怒られる構図になっちゃうから。ここは強気で行く。

「ありがとう。よろしくね、一行さん」

「お気づきでしようが、堅書さんと……交際を、している者です」

一行さんは唐突に彼女宣言してきた。何なんだ。まるでペースがつかめない。とはいっても、ドヤ顔でマウント取つてくる風でもなく、むしろ照れを感じる口調で、ちょっとだけバリアが弱まつた気がした。警戒すべきなのか気を緩めていいのかわからない。それにしても、独特な表現をする人だな。

「はあ……それは、どうも」こちらも意味不明な返しをしてしまう。

「それで、話というのは、堅書さんのことです」

「ひつ」

キラリと光る刃のような言葉に、油断してた背筋が思わず伸びる。これ以上彼に近づか

ないでもらえますか、とかかな。あるいは、私達結婚するんです、とか。最悪の想像が無限に湧いてくる。

「堅書さんから、貴方がいつも猫の面倒を見て下さっている、と聞きました。今日もそれで来てくださっていたのですね」

「ぎやあ、全部バレてんだけど！ と、とにかく、いろいろと情報を下方修正しよう。堅書『君』なんて馴れ馴れしく呼んだらきっと殺される。あれ、もしかしてさつき廊下で口にしちやつたかな。……うん、まあ、忘れよう。

「あ、ああ、猫ね。そんな、いつもとかじやなくてごくたまーにだけど、ほら、あたしも桂だし、堅書……さん、時々研究室に泊まつたりするからさ、そういうときだけごはんをね。あ、部屋は入つてないよ！ マジで！ 玄関のどこでごはんあげてるだけだから」

「いつも、ありがとうございます」

責められるかと思つたら、無表情とはいえ感謝されて、拍子抜けした。またほんの少し、バリアが弱まつた気がしないでもない。そうであつてほしい。

「ところで、堅書さんがアルタラセンターを目指していることは、ご存じですか」
いや、なんつーか、この人も話があつちこつち飛びね。

「うん。知ってる。……って、あ、もしかして合格内定したの?」

「いいえ」

「落ちたの!?!」

「結果が出るのは来月です。……ですから、今から話すことは、あくまで堅書さんが合格したと仮定しての話になりますが」

完全に翻弄されてあたふたしてるこっちを、一行さんがぐいと見据えてくる。

「堅書さんがアルタラセンターに入所後、やろうとしていることについては、どこまで情報をお持ちですか」

「え、えっと……」

たしか堅書君は、先生のことは彼女さんに話してないって言つてた。だから、黙つておいてあげたほうがいいんだろうな。あれは、あたしと堅書君の秘密だから。

「あー、実はよく知らないんだよね。何かやりたいことはあるみたいだけど」

「……そうですか」

沈黙。

え、何この間。^ま怖い。何か本格的に怒らせるようなこと言つちやつたかな。怖すぎる。

そのまま一行さんは無言でお茶碗に残ったご飯の最後の一 口に箸をつけ、お味噌汁を静かに飲み干した。完全に蛇の生殺し状態。一行さんはお茶を啜つて一息ついてから、ようやく再び口を開いた。

「ならば、なおさらのこと、情報を共有しておかなければ」
緊張が走る。

「堅書さんの計画については、私なりに調査しました。恐らくですが、真相に近いところまでたどりつけたのではないかと」

怖っ！ 理解のある彼女さんかと思つてたけど、泳がせといて陰で全部把握してるのである。これ、絶対隠し事できないやつじやん。いやあ、堅書君も大変な人を彼女にしちやつたもんだね。

この様子じや、先生のこともきっとバレてそうだな、とあたしは身構える。
だけど、続く一行さんの言葉は、あたしの予想を遥かに飛び越えてあさつての方向に飛んでいった。

「堅書さんは、おそらく、別の世界に行こうとしています」「え？ 何？ 世界？ 留学？」

「別の宇宙、という表現のほうが伝わるでしようか」
「……………はい!」

別の、宇宙。

何を言つてゐるんだろうこの人は。

「この宇宙の外に存在すると予想される別の宇宙、の意です」
一行さんの顔をまじまじと見る。冗談を言つてゐる顔には見えない。もしかしてスピリチュアルとかそつち系の人なんだろうか。

全然違うよ、堅書君はただ先生に会いたいだけなんだよ、と思わず言いたくなつたけど、そういえば堅書君、「先生のいる世界に行きたい」って言い方をしてたのを思い出して、一気に戦慄する。意味不明だった先生の話も、そう考えるといろいろと辻褄が合うような気がすらってきて、頭がクラクラしてくる。

「荒唐無稽とお思いでしょうが、無理からぬことです。私自身、幾許かの疑念は残つていますから」

てつくり何かの比喩だらうと思つてたけど、百歩譲つて先生が本当にどこか別の「世界」にいる、と堅書君が思い込んで、そこに行こうとしてるんだとしたら。考えたくない

けど、一行さんの言うとおり、別の宇宙とやらをほんとに目指してゐんだとしたら。

——頭おかしい。やつぱり堅書君は完全に頭おかしい。もはやバカとか変人とかそういう次元じやない。人としてヤバい領域に入してゐる。

そしてそんな話を真顔であたしに振ってくる一行さんも、負けないくらいヤバい。

だけど、なんとなく頭ごなしに全否定しちゃいけない気はした。背景に堅書君なりの筋の通った根拠があるんだろう、と思いたかった。同じ学科で学ぶ同士として、科学的思考くらいはまだ捨てないでいてほしいし、そもそも頭脳明晰な彼がスピリチュアルとかにハマるとはとても思えなかつた。

それに——もしも堅書君が完全にただの妄想に取り憑かれてただけだつたら、彼の今までの頑張りは完全に無駄になつちやうことになる。単なるデータラメのために、すべてを我慢してきたことになる。それはあまりにもすごい。たとえほんの一握りでもそこに真実があつて、堅書君は確かにこの世界の本質を見いだしたのであつてほしい。頭では否定しつつも、このめちゃくちゃなホラ話を信じてみたいと思つてしまつての自分がいた。

だいたい、まだ話のイントロすらまともに聞けてない。『別の世界』というのも何か総人独特の言い方とかなのかもだし。早合点はよくない。一行さんは、あたしに、何かを教

えてくれようとしている。堅書君にまつわる何かを。

「えっと、ちょっとまだ全然ついてきてないけどさ」

すっかり冷えきったお茶を一口飲んでから、あたしは背筋をただして、一行さんの琥珀色の澄んだ瞳を見すえる。嘘をつけない人の目だ、と感じた。

「とりあえず、最初から順を追つて説明してよ。全然わかんないかもだけど、ちゃんと聞くから」

一行さんの瞳に強い決意の色が見えた。

「——わかりました。お話しすると決めたからには、中途半端はいけません。やつてやりましよう」

長い話になりそうな予感がした。先にヤタの所に寄つておいて本当によかつた、と思つた。

(一一)

一行さんは開口一番、

「まず、この宇宙がどうやつて開闢したかについてはござ存じでしようか」といきなりすごい魔球を投げてきた。あやうくデッドボールになるところだった。とにかくボールを投げ返さなきや、話が続かない。

「え、えーっと……ビッグバンだつけ？ 宇宙論の講義でざつと習った」

「はい。初期宇宙の微小な量子ゆらぎが、指數関数的にインフレーションを経ることで、現在の宇宙が形作られた、という説が有力です」

言葉を選びながらゆつくりと一行さんは説明を開始する。ああ、別に怒つてるわけじゃなくて、そういうしゃべり方の人なんだ、と気づく。あたしが勝手に怖がりすぎてたかも知れない。

「ビッグバン仮説からは、因果律的に関わりを持たない——つまり、観測できない別の宇宙がこの宇宙の外に無数に存在するだろう、と予言されています」

曲がりなりにも講義でやつたから、一応今のところ、現代宇宙論の言葉で語ろうとしてることだけはわかつた。だけど、まだ真意は不明だ。警戒しつつも、できるだけ歩み寄ろうと努力する。

「うん。マルチバース、多元宇宙ってやつだよね。あ、さつき言つてた別の世界って、も

しかしてこれ?」

「はい、私はそう解釈しています。ただし、多元宇宙は決して物理的に実証することはできません。私達の宇宙から、他の宇宙を絶対に観測できないからです」

「まあ、そうなるね」

「つまり極端に言うと、ただのお話に等しいわけです。物理学の範疇の外でしか語ることができない」

「ん? ただのお話……?」

「ここで、少し私の専門の話をさせてください。このような、物理学の外側を扱う領域が、今私の研究テーマです。形而上学、メタフィジックスの一分野です。特に、ナラティブな視点から多元宇宙を記述しようと試みています」

「ナラティブ……?」

「さつき、ただのお話と言いましたが、お話、物語というのは、事象を主観的に記述したものですね。事象を客観的に記述する物理学とは対極にあります。つまり、お話の世界にすぎない『宇宙の外側』には、客観的な時空間はもはや存在せず、主観的時間と主観的空间のみが定義されます」

「……？？？」

「逆に言えば、主観的な時空間としてであれば、この宇宙の因果律の外側を記述できる可能性があるわけです。これが、私が今研究している物語論的宇宙論^{ナラティブ}の非常に大雑把な説明です。この宇宙の因果的閉包性は、あくまで物理領域に対するのみ規定される経験則ではなく、ナラティブな領域ではその限りではありません。むしろ、時間も空間も本質はすべて主観的な物語なのであって、これまでの宇宙論では客観的な側面のみが注目されてきたに過ぎ——」

「ちょ、待つて待つて、ストップ！……ごめん、ちょっとマジでわかんない」

辛抱できなくなつて話をさえぎる。何やら変なスイッチが入っちゃつたらしい。物理の話であればまだギリギリついていけたけど、物語がどうとかいうあたりで完全に脱落した。

「すみません。確かに、本題ではありませんでした。ともかく、この宇宙の外ではあらゆる事象は主観でしか記述できない、ということだけ覚えていただければ」

一行さんはほんの少し、すまなそうな顔をした、よう見えた。さつきよりは、不機嫌そうな表情の裏に隠された本当の感情を読み取れるようになつてきた、ような気がする。

「……とりあえずわかった、ことにする。続けて」

「はい。物理的に別の宇宙に行くことは不可能でも、ナラティブなアクセスであれば可能ではないか、と私は考えています。物語であれば、因果の壁を超えることができる。ここでいう物語とは、客観的・物理的身体ではなく、主観的・情報的意識に基づいた手段、すなわち量子精神によるアプローチ、です」

「量子精神……あ」

その単語は、千古先生の講義で聞いた覚えがあった。確かに、器と中身、という言い方をしていました。量子記録データを利用することで、脳に損傷を負ったネズミが目を覚まして動き出す、っていう動画を見せられたつけ。

「えっと、言いたいのは……量子精神なら、つまりアルタラが使えるなら、別の宇宙とやらに行けるかも……ってこと?」

「一言で表すならば、そういうことです。——堅書さんと同じ学科なら、量子記録技術はお詳しいですよね」

「まあ、二回生の後期の講義でやった程度だけど」

「十分だと思います。厳密にはアルタラそのものを利用するというより、その派生技術としての量子精神の同調・制御手法をナラティブ時空間に導入する、という方法論を、堅書

さんは検討しているようです」

話が飛躍しすぎて半分もわかつてないけど、堅書君がアルタラセンターにこだわる動機、特に直接アルタラのシステム権限が得られるエンジニア職を狙つてる理由として、その仮説は確かに符合する気はした。いつだつたか、堅書君が千古先生のさらにずっと先を見ているような気がして空恐ろしくなったけど、あの直感は正しかったのかも知れない。

「それでアルタラセンターを目指してたのかー。ま、ほんとに別の宇宙に行けるかどうかは置いといて」

「はい。まだ予備実験で仮説を支持する結果が出ているという程度です。個人的には、眉唾とまでは思いませんが、現時点でのフィージビリティは五分五分ではないかと」

「そりや、そんな簡単に別の宇宙に行けたら世の中ひっくり返るよ」

「ともあれ、成功率自体は今後研究が進めば上がっていくでしょう。ですが、このやり方には致命的な問題がある。最近、私はそれに気づいてしまったのです」

景気のいいホラ話の雲行きが急に怪しくなった。

「致命的な問題?」

「はい。猫の面倒を見て下さっている貴方にはどうしてもお伝えしなければと」

あたしはごくりと唾を飲み込む。「……続けて」

「ナラティブ時空間での量子精神の振る舞いは古典的な二体問題で近似できます。つまり、軌道——という言い方が適切かわかりませんが、別の宇宙にアクセスする際の軌跡は二次曲線で表されます。ですが、どう計算してもその離心率 e が1を超えてしまう。双曲線になってしまうのです」

ああもう、また一人で暴走してる。だけど、致命的な問題って言われちゃつたら、スルーするわけにはいかない。

「はい、ストップ。えっとさ、もう少しあみ砕いてもらえないかなって」

すると一行さんはボールペンを取り出して、手元にあつた紙ナップキンに何やら書き始めた。

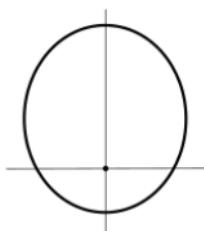
「うんと簡略化します。たとえば地球から月に向かう宇宙船は、天体の重力場の影響を受け、ある軌道を描きます。それと同じように、この宇宙から別の宇宙に向かう際にも、軌道のような一種の道筋が定義できると想像してください。この道筋は二次曲線で近似できることです」

「……はあ」

「ご存じのとおり二次曲線は、離心率 e によってそのかたちが変わります。 e が 1 より小さいと楕円、 $e = 1$ で放物線、1 を超えると双曲線」

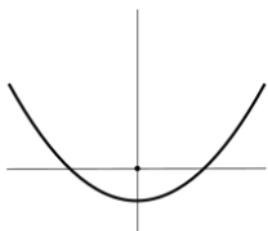
一行さんは楕円、放物線、双曲線の図を横に並べて描いていく。高校の頃、数Cで散々やつたつけ。楕円も放物線も双曲線も、実は共通の式で表せて、離心率っていうパラメータの値が違うだけなんだっていうやつ。見た目が全然違うのに実は同じものなんだって知ったときは、ちょっと面白かったな。

$$0 < e < 1$$



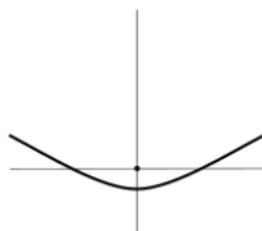
椭円

$$e = 1$$



放物線

$$e > 1$$



双曲線

「軌道が橙円であれば、一周してまた元のところに戻ってきます。これは、元の宇宙に帰還することに相当します」

手書きの橙円に沿って、ボールペンの先が大きく円を描く。

「ですが、放物線、双曲線の場合、曲線は閉じていません。漸近線に沿って無限遠方に飛び去るしかない。太陽系に進入する恒星間天体のようなものです」

描かれた双曲線の弓なりのカーブを指でたどつてみる。その曲線は紙ナップキンの外側、無限の彼方からやつてきて、反対側の端から再び虚空に向けて続していく。紙ナップキンの中には、決して戻つてこない。

「えっと、それって。もしかして」

認めたくなかった。それが意味するところを考えたくなかつた。一行さんの言葉の続きを聞きたくなかった。

「はい。言い換えると、別の世界への旅路は片道切符になつてしまふ、ということです」一行さんはあたしの祈りなんかおかまいなしに、そのドライな事実をこちらの脳天に突きつけた。

(二二)

「片道切符……。別の世界に行つたきり、戻つて来れないってこと？」
混乱するあたしに、一行さんは淡淡と話を続ける。

「その通りです。もちろん私のほうでも精円解、つまりeが1未満となるような解がない
か、探してはいるのですが」

言葉で言われても、まだピンと来ない。

「それってさ、物理的にはどういう状態なわけ？　ていうか全然想像がつかないんだけど、
まさか行く時もほんとに宇宙船に乗つてくるわけじゃないんだよね？」

「宇宙船はただの比喩です。まず量子精神を物理脳神経から切り離して、連結していない
量子記録データの形にする必要があります」

「量子精神を、切り離す……」

講義で見たネズミの動画を思い出す。あの動画では確か、脳死状態のネズミの脳神経を
量子精神で修復して、ネズミを“生き返らせ”ていた。

ええと、今回は、その逆つてことだよね。つまり、量子精神を物理脳神経から切り離し

たら、処置を受ける前のネズミみたいになるはず。

動画の冒頭シーンを記憶からたぐり寄せる。仰向けにぐつたりと脱力していたネズミの姿。だらんとした手足、頭から伸びる電極。

吐き気がした。

「待って。切り離すつてことは……」

「恐らくご想像のとおりです」

「脳死……だよね。体のほうは」

一行さんは頷いた。

「もちろん、量子精神が戻つて来られるのであれば、再び物理脳神経に同調させれば、原理上は元の状態に戻れるはずです。モデル動物による実験はご存じですよね」

「うん。講義で見た。脳死したネズミが復活してた」

「ですが、今回のケースでは、そもそも量子精神がこちらに戻つて来られません。つまり、

「脳死状態の身体だけが残された状態となります」

「そつか。……最悪だね、それって」

別の宇宙がどうとかはまだ、信じ切れてない。だけど、ネズミの動画を実際に見てたから、量子精神を切り離したら脳死になるのはほぼ確実なんだろうなって思った。だいたい、一度脳死になってしまった人を再び蘇らせるのも常識的に考えてもかなり大変に思えたし、ネズミの実験だって成功率100パーセントってわけじゃないはず。そう考えると、やっぱり堅書君のやろうとしていることはどう見ても、不幸に突き進んでいく自殺行為に思えた。

堅書君がもしこの計画を実行したら、その量子精神は切り離されて、永遠に失われてしまう。残された体は、あのネズミみたいな脳死状態になってしまう。
なんとしても止めなきやいけない。絶対に。

計画を中止させたら、堅書君はきっとすごくがっかりすると思う。彼の長年の夢を絶つてしまるのはとても心苦しいし、あたしだって本当は堅書君の夢が叶ってほしかった。先生に会つてほしかった。だけどその夢は、脳死になつて周りの人達を悲しませてまで叶えるべきものじやない。堅書君が罪悪感から解き放たれても、人生がそこで終わっちゃつたら何の意味もない。戻つて来れないなんて、そんなの、先生もきっと喜ばないよ。だからさ、何か別のかたちで堅書君の夢を叶えようよ。堅書君が幸せになれる方法は、きっと他

にもたくさんあるよ。

「あのさ、一行さん」

「はい」

「ありがとね、教えてくれて」

わざわざ忠告してくれた一行さんに、素直に感謝したいって思った。

「ね、一行さんさ、早くこの計画を止めよう。堅書さんには悪いけどさ、一行さんから説得すればきっとわかつてもらえるって」

さすがに、一行さんの説得を聞き入れないほど、堅書君もバカじやないよね。

「堅書さんを、脳死になんかさせない。そんな不幸な目には絶対に遭わせない。アルタラセンターに入るのは別にいいとしても、少なくともこのまま実行したら何が起きるのか、全部ちゃんと説明すべきって思うんだ」

「すでに一通りの説明はしました」

「え」

「没頭するようになりました」

「……あいつ、バツカじやないの!?」

思わず言ってしまった。確かに最近、研究室に泊まり込む頻度が上がったなど感じてたけど、それは最終試験に向けた追い込みなんだつてばかり思つてた。

堅書君。マジで何考えてんの?

戻つて来れないって、脳死になつちやうつてわかつて、何でそこまでして先生に会いに行こうとしてんの!?

完全にどうかしてる。恋人である一行さんでさえ止められないなんて、ヤバいくらいの重症だ。

だけど、二人がかりなら、もしかしたら。

こんなあたしでも、一行さんの説得の手助けになれるかもしれない。ていうか、もうそれしか道はないと思つた。

「だって脳死になつちやうんでしょ? 何考えてんのか知らないけどさ、やっぱそれ、ありえないって!」

ぐいと身を乗り出して続ける。

「もう一度、今度はあたしと一行さん、二人で説得しよう。あたし全力で手伝うからさ、何としても止めよう。ね」

それを聞いた一行さんは、少し困ったような表情で、

「いいえ。私は、堅書さんを止めようとは思っていません」と言つた。

いきなり鈍器でガツンと頭を殴られたような気がした。その言葉の意味を理解するのに、数秒、かかった。

「…………今、なんて？」

「私は起こりうるリスクを説明しただけであつて、最終的には堅書さんが判断すべきことです」

「え？ なんで!?」

止めたいからこの話をしてくれたんじゃないの？

そりや、堅書君、意地つ張りだし、人の話聞かないし、説得は簡単じやないってのはわかるよ。だけど一行さん、なんでそれをのうのうと黙つて見てるだけなの？ 自分の言つてる意味わかつてる？

「本人はやりたいのかもしれないけどさ、そんなの自殺行為だよ。そこで人生終わっちゃうんだよ！ こんな不幸なことってないよ。周りの大変な人達、全員置いていこうとしてんじゃん。一行さんだつて、もう二度と会えなくなっちゃうんだよ？ 一行さんはさ、それでいいわけ？」

「もちろん、そのような事態は可能な限り回避したいと思つています。離心率eが1未満になるような解は探し続けています。ですが、もしどうしても解が見つからず、それでも堅書さんが諦めず、険しきに挑むというのであれば」

一行さんの瞳の奥に、不撓不屈の炎が妖しく揺らめいたように見えた。

「——私も、諦めません」

狂気に彩られた、炎が。

「その時は、私も堅書さんと一緒に行く、というまでです。——そうなつた暁には堅書さんの猫を、貴方に託したいのです」

ようやく、あたしは理解した。

堅書君も頭おかしいけど、一行さんはその何万倍も。

どうかしてるんだってことを。

「…………は!?」

視界がぐにやりと歪むのを感じた。

目の前の彼女が何を言つてゐるのかわからない。全然わからない。人の姿はしてゐけれど、人の心を持つてない、理解の及ばないサイコパス。

「何なの？　何考えてんの!?　一緒に行くつて何？　一行さんも脳死になつちやうじやん。バカじやないの？　諦める諦めないとかそういう話じやなくない？　そんであたしにヤタの面倒見ろつて？　どんだけ身勝手なこと言つてるかわかつてんの!?」

都合よくヤタを押しつけようと思われてたのもショックだった。頭がぐちやぐちやになつて、もはや自分でも何を言つてゐるのかわからないけど、もう止められなかつた。

「好きな人がバカやろうとしてたら、破滅の道に突き進もうとしてたら、それを全力で止めるのが恋人の役割なんじやないの？……あたしだつたら絶対止める。堅書君が好きなら、堅書君に幸せになつてほしいつて思うもん。なんで止めないの？　それどころか、わざわざ堅書君を後押しして不幸に引きずり込もうとしてんの？　そんなんで一行さん

は……堅書君の恋人だつて言えるの？」

「堅書さんは、私が絶対に不幸にさせません」

一行さんの返答は完全にあさつての方向を向いてて、怖いくらいに話が通じてなかつた。

一瞬でもわかり合えたと思った自分が情けなかつた。もう、絶望と幻滅しか感じない。

「なに一人で堅書君を守つた気になつてんの？ そんなの全部自己満じやん。別の宇宙なんであるのかどうかもわかんない、誰も実証できない。そんなもののために二人とも無意味に脳死状態になつて、ただ一人の人生終わるだけじゃん。絶対完璧不幸まつしぐらだし」

もう限界だつた。

「ご家族とか、大学のみんなとか、ヤタとかさ……。残される人達の気持ちも考えてよ！」

一行さんは何も答えなかつた。表情すら変えず、ただ黙つていた。それを見て、もう何を言つても無駄なんだなつて思つた。一行さんにも。そして、堅書君にも。

あたしがずっと見てたものは幻想でしかなかつた。きっと最初から、堅書君はそのつもりでいたんだ。それを一行さんが本気で後押ししてゐる。もはや世界中の誰も、彼らのエキ

セントリックな野望を止められないんだろうなって思った。一行さんの言葉の端々から感じ取れる二人の絆はそれほどまでに強固で、あたしのささやかな祈りが入り込める余地は一ミリもなさそうだった。

自分で何かが音を立てて崩れた気がした。一年間、そつと育んできた何かが。「残されたあたしがどんな思いで、ヤタと生きていくと思つてんの……」

立ち上がってコートを羽織る。バッグを肩にかけて、トレイを手に持ち、背を向ける。顔なんてもう見たくなかった。

「……行きたいなら勝手に行けば。そんで一人で仲良く勝手に不幸になりなよ」

呪いの言葉を吐いて、あたしは一人、振り返ることなくその場を離れた。一行さんは、追つてこなかつた。

カフェテリアを出ると、冬の日はもう傾きかけていた。コートの襟元をぎゅっと締め、広い坂道を早足で下る。自然と涙が零れた。

もう堅書君には会えないな、と思つた。裏切られたっていう気持ちはなかつた。あたしが何もわかつてなかつただけ。あの二人は、あたしの理解の及ばない地平に向かうことを

選んだ。それはもう、あたしがどうこうできるものじゃないし、そこにモブの居場所はない。ただそれだけのことだ。

でも。

ヤタはどうなるんだろう。

何も知らないヤタ。ピンと立つた耳を、驚くとまんまるになる瞳を、小さな後頭部を思
い浮かべる。

堅書君といたつてあの子は幸せになれない。見捨ててはおけない。堅書君の家に突撃し
てヤタを引き取ろうかと考えた。堅書君は絶対不幸になるつて最後に捨て台詞の一つも吐
いて、段ボールごと連れて帰ろうかと悩んだ。

だけど、もしあたしがヤタを引き取つたら、一行さんの日論見の通りになつてしまふ。
二人の自殺行為を認めたことになつてしまふ。ヤタを厄介払いした二人は、喜んで不幸の
道に突き進んでいくだろう。彼らがどうしようともう彼らの勝手だけど、自分の行為がそ
の引き金を引いてしまうことだけは許せなかつた。

何日考え続けても答えは出なかつた。アパートの前まで何度も行つてみたけど、どうし

ても突入する決心がつかなかつた。

二人を止める勇気がない一方で、黙認もしたくないあたしは、悩んだ末にある卑怯な考えにたどり着いた。これは別に、今日明日どうこうつて話じやない。少なくとも堅書君がアルタラセンターに入るまでは、事態は何も進展しない。

だから目をつぶつて、先送りしよう。今はもう、何も考えたくない。

あたしは、考えるのをやめた。堅書君のこととも一行さんのこととも、ヤタのことも、心の奥深くに沈めて思い出さないようにした。

季節は容赦なく進み、やがて京都市内にも桜の花がちらほらとほころび始めて、あたしは四年間の大学生活最後の日を迎えた。

第四章 2034年 春

(一)

吉田キャンパス本部構内は、いつもと違う華やかな空気に満たされていた。正面のクスノキの周りは記念撮影をする人達でごった返している。そぞろ歩く色とりどりの袴姿、一発ネタのコスプレ集団、誇らしげに時計台の前に立つ親子連れ。外部会場での卒業式も学科ごとの学位授与式もひととおり終わって、みんな思い思いに時間を過ごしている。

喧噪から少し離れて、あたしは工学部のほうに向かってぶらぶらと歩いて行く。うちの学科はほとんどみんな大学院に進学して、四月以降も桂に居続けるから、卒業といつてもそんなに感慨はない。だけど、四回生の間はまだ時々来ることがあったこの吉田に来る機会は、滅多になくなる。そう思うと、あたりの建物をなんとなく目に焼き付けておきたくなつた。

反射的に振り向いた。

堅書君と一行さんが、並んで立っていた。

総合校舎の手前の大木の桜の木はもう五分咲きになつてて、青空とのコントラストがすごくきれいだ。スマホをかざして構図をあれこれ試してると、背後から名前を呼ばれて、

学科の学位授与式にもいた堅書君は、普通にダークグレーのスーツに紺系のネクタイ。一行さんは、落ち着いたグリーンの袴に古典的な梅の柄の小振袖で、髪をアップにしてる。

学位記を抱えて桜の下に立つ二人はまるで一枚の絵みたいな完全無欠のカップルで、ほんの一瞬、思わずあたしは目を奪われた。

すぐに、すべてを思い出して嫌な気分になる。正直、今日この二人には会いたくなかつた。二月のあの日からずっと、できるだけ思い出さないようにしていた。

「……何」

思つた以上にとげとげしさが声に出てしまつて、そんな自分が余計嫌になる。

「えっと、その……ごめん。本当にごめん。何から謝ればよいかわからないけど、でもどうしてもこのままにしたくなくて」

「……」

今さら何を言い出すんだろつて思つた。無駄なのに。

「一行さんから話は聞いた。身勝手なことはわかっている。許せなくて当然だ。でもどうしても説明しておきたいことがあるんだ。三〇分だけ、時間をもらえないかな。……ヤタのためにも」

堅書君は卑怯だ。ヤタの名前を出せば、あたしが断れないって知つてて言つてる。一行さんも何やら真剣な面持ちで頭を下げた。

「私からもきちんとお詫びを。それと、お見せしたいものも。お時間、頂けませんか」
二人を冷たくあしらへ、無下に断るための気力すら、もはや湧いてこなかつた。もう
いつそ、好きにすればいい。

「……わかつた。三〇分だけね」

会うのも、きっとこれが最後だろうし。

あたしは二人の正面に向き直つた。

がつしりした一枚板の長テーブルに作り付けの長椅子。詰めれば両側に五人ずつは座れ
そうな巨大なテーブルをあたしたち三人は贅沢にも占拠している。

本部構内のめぼしいベンチはどこも卒業生とその家族で満席で、飽きるほど通つた中央
食堂もさすがに今日はちょっと、ということで、結局そのまま構内を縦断して、北門きたもん前に
昔からある有名な喫茶店まで来てしまつた。ここに歩いてくるまでにすでに十五分くらい
経過していく、残り十五分で解放してもらえるとはとても思えない。あたしは半分諦めの
境地でここに座つてゐる。散々な卒業式だ。

意外にも、店内の混雑度は普段と変わらない。袴姿は目立つかなと思つたけど、周囲の

誰もまるで気にしてないみたいだ。年齢不詳の男性が分厚い英語の本を読んでたり、留学生たちがタブレットを片手に静かに議論してたりして、いつもと同じ時間が流れている。今日が卒業式だなんてことを忘れちゃいそうになる。

向かいに並んで座ってる堅書君と一行さんは、互いに敬語でひそひそとメニューを相談し合っている。

「あ、一行さん、ほら、学割メニューがあるみたいですよ」

「ありがとうございます。……では、私はこれを」

「僕も、カフェにしますね」

でますます禁止令の効力範囲がうちの班だけってことは前々からわかつてたけど、一行さんともですます調で話してゐるなんて、想像すらしてなかつた。その光景はあたしに予想外のダメージを与えた。誰にも邪魔できない完成された空間が二人を包んでいる。むしろタメ口のあたしのほうが、アウエイ感を持つてしまう。たつた一メートル先に並んでる一人が、とてもなく遠く感じた。

「カフェ三つお願ひします、学割で」

学生証を掲げたのはあたしと一行さんだけだったけど、店員さんは三人とも学割扱いに

してくれた。まあ、今日こんな恰好をしてる時点で、どう見ても学生だし。

「えっと……ありがとう。僕の学生証、さつき教務に返却してしまったから」

「あ、てことは」

「ああ、おかげさまでアルタラセンターへの入所が決まった。まずはお礼を言いたい。本当にありがとうございました、感謝してる」

堅書君はそう言つて頭を下げた。

「そつか、おめでとう」

うつ、と内心思いながら事務的に返す。

入店したときから、あたしの心は凧いでいた。何も考えないようにしてた。なのにこんな話されると、思い出しちゃうじゃん。しかも、うつかりこの話を引き出してしまったのは自分だ。濶のように心の奥底に溜まつてた不機嫌が浮き上がりかける。

「そのことで、ひとつ謝りたいことがある」

二人で無謀な実験して死ぬって話？ その話はいいよ、もう。勝手にしなよって言つたんだから。

心をさらに硬くする。強くバリアを張る。

だけど。

続く堅書君の言葉に、あたしは完全に混乱した。

「もしかしたらあらぬ誤解を与えてしまったんじゃないかなって。心配をかけて本当に申し訳ない。だけど、訂正させてほしい。——僕達は片道切符の旅に出かけるつもりはない。もし行けるとしても、必ず戻ってくるつもりだ」

え……？　聞いてた話と違うんだけど。

「は？　戻つて来れないって言つてたじやん。じゃあ、あの話は何だつたわけ」

「私からもお詫びを。本当に申し訳なかつたと思つています。ただ、言い訳がましいのは承知ですが、騙す意図は全くなかったのです。貴方にお話ししたあの時点では、私達も確かにそう思つていました。帰還は不可能であると」

一行さんが弁明する。相変わらず無愛想なその口調には確かにどこか、申し訳なさそうな感触があつた。

「しかしその後、堅書さんと検討を重ねた結果、離心率 e を1未満に抑えられる可能性が出てきたのです」

何それ。

そんな後付け説明みたいなこと今さら言われても。もし本当ならそれは普通に朗報で、あたしは無駄に心配してたことになる。だけど、信用していいものなんだろか。そんな展開、あまりにご都合主義過ぎる。

「そのきつかけとなつたのが……貴方です。貴方は、私達を救つてくれました」

「へ…………? ? ? ?」

行先がまるで見えなかつた話の矛先が急角度でこつちに突つ込んできて、気づいた瞬間には吹つ飛ばされていた。

「ああ、一行さんの言うとおりなんだ。助けてくれて、本当に感謝している。おかげで、僕達の軌跡は橢円を描けるようになる。またここに戻つて来れる」

あたしは完全にあきれ返りながら、目の前のバカツプルを見る。

「あのさあ……」

ああもう。まったく、この二人は。いつだつてそれだよね。いつもそうやつて、自分たちだけ納得して、論理を全部すつ飛ばしてさ。

「……話飛びすぎなんだつてば!!」

彼らの論理の飛躍には慣れたつもりでいたけど、今日のそれは特大の場外ホームラン級

で、史上最高に話が見えなくなっていた。さつきまで心を満たしてた虚無すら、どつかに吹き飛んでしまった気がする。あの胸糞悪い心中話がほんとにあるたしの誤解だつたついうなら、真相で早く上書きしてしまいたい。もうホラ話でも何でもいい。後味の悪い誤解に、これ以上苛まれたくない。

「何だか知らないけど、あたしが勘違いしてたって言うならさ」

運ばれてきたコーヒーカップを一口啜つてから、

「——ちゃんとわかるように説明してもらおうじゃないの」

拳でテーブルをどんと叩いて、二人を睨み付けた。

(二)

タブレットの画面いっぽいに赤青のヒートマップが映し出されている。あたしは湯気を立てるカップを手に、一行さんの説明に耳を傾けている。

「これが一年半前、二〇三二年六月時点でのアルタラの量子記録から抽出した、堅書さん
の量子精神データです」

「見やすいように二次元に縮退しているけど、実際には数千兆のパラメータからなるベクトルの集合体だ」

堅書君が補足しながら画面をタップして、凡例を表示させる。タブレットの操作については一行さんは不慣れみたいで、途中から完全に堅書君の仕事になっていた。

「そしてこちらが今月、二〇三四年三月の量子精神データです」

もう一枚、似たような画像を堅書君が呼び出して並べる。一行さんの解説は続く。

「もちろん細かい違いはありますが、根幹は本来ほとんど変化しないものです。特にナラティブ宇宙論で重視される物語への志向性に関する成分は、一、二年程度ではそう変わらないのが普通です。ですが、この二つのデータを調べるうちに、それまで注目していなかつたパラメータで興味深い差異が見つかりました」

「ふうん。それで？」わからないなりに相槌を打ち続ける。

「その差分と強い相関を示す周辺の量子記録を抽出して可視化を試みたのが、こちらです。もちろん量子記録データの内部表現をアルタラから直接取り出すことは原理上不可能ですから、あくまで拡散モデルによる推定です。画像生成AIと原理的には同じと思つて良いかと」

解像度の低い動画クリップの再生が始まった。全体的にぼやけていて、細部はよくわからぬ。だけど、動画の中でうごめいてる黒っぽい何かの特徴的な動きに、あたしは見覚えがあった。

「…………え、これって。……ヤタ!?」

それは確かに、ヤタの動きだった。しつぽをぴんと立ててすりすりしてくる姿、大きく伸びをしてごろんとお腹をみせる姿、一心不乱に猫ミルクを舐める姿、ストーブの前に陣取つて丸くなってる姿。次々とカットインする粗いピクセルの中にいるのはどう見てもヤタだ。子猫の時からずっと見てきたから、はつきりとわかる。

画面がズームアウトして、ヤタの隣に何か別の物体がフレームインしてくる。猫よりもっと大きな何か。手ブレとともにアングルが変わつて、動いているそれが人だと気づく。明るめの髪に白っぽい服。ヤタをなで回したり、タオルでくるんだり。また場面が変わる。何かをフライパンからお皿に盛りつけている。パスタだ。二皿のうちのひとつをこちらに差し出してくる。何かに腰掛け食べ始める。ミュート再生だから音声は聞こえないけど、食べながらもこっちに何か話しかけてきたり、大爆笑したり、小突いてきたり、睨み付けたり。くるくると表情を変えながらも、カメラに向かつて笑いかけてくる。

え。待つて。何これ。今、あたし、何を見せられるんだろ。
そこに映っているのは。

毎朝の洗面台の鏡の向こうに、散々見飽きた顔だった。

「なに、これ……。あたし……？ あたしが……映つてんの？」

堅書君が無言で頷いた。

「え？ な、なんで!? いつの間に撮つてたのこれ！」

「撮つてたわけじゃない。僕の量子精神データを元に生成した動画だ。僕の視点になつて
るのはそのためだ。その……なんか、ごめん」

「なつ……」

顔が一気に熱くなる。短いカットが次々に映し出される。画面の中のあたしの服装は次
第に変化してゆく。薄手から厚手に、ブラウスからカーディガンに、セーターに。コンビ
ニ袋からこっちに差し出される中身もアイスからおでんに変わる。ヤタもだんだん大人の
猫のフォルムになつていく。時折知らない人や風景の映像も混じる。だけど圧倒的にヤタ
とあたしの姿が多かった。何気ない日々の時間が、その動画には連なつていた。

決まり悪そうにしてる堅書君の横でそれを無言で眺めている一行さんに気づいて、震え

上がりそうになる。だけど一行さんは超然として説明を追加する。

「これらの量子記録に共通して見られるパラメータは、現実を強く志向する成分でした。ナラティブ宇宙論が主に扱う、物語を志向するベクトルとは直交するものです。というより、このような軸の存在に、これまで私は気づいていませんでした。私も堅書さんも元来、ナラティブ志向性が平均より高い人間です。ですから、どうしてもそちらの成分にのみ注目してしまい、可視化の結果にも知らず知らずのうちに偏りがありました」

別の動画が始まった。こちらも雑多な映像の集まりみたいだ。髪の長い女性が頻繁に登場する。一行さんだ、とすぐに気づいた。高校の制服に始まり、本を読んでる横顔や勉強する姿、浴衣に水着。あたしには見せたことのない笑顔をこちらに向けている。それに次いで多いのが千古先生や大学の風景、アルタラのイメージ、講義資料や何かの計算結果。白いフードの男性の姿やSF映画のワンシーンのような不思議な映像もあった。

微妙にマウントを取られてるような気もしたけど、見果てぬ夢を追い求めて浮世離れした生活を送つてた堅書君の原風景はきっとこっちだつたんだ、と直感的に感じた。

じゃあ、最初の動画は何だったんだろう。ヤタとあたしが映つた映像は。一行さんは何が言いたいんだろう。

「行きて帰りし物語、という強力な物語類型があります。古今東西の冒険譚に共通して見られるその構造は、必ず非日常への旅立ちと現実への帰還とがセットになっています」

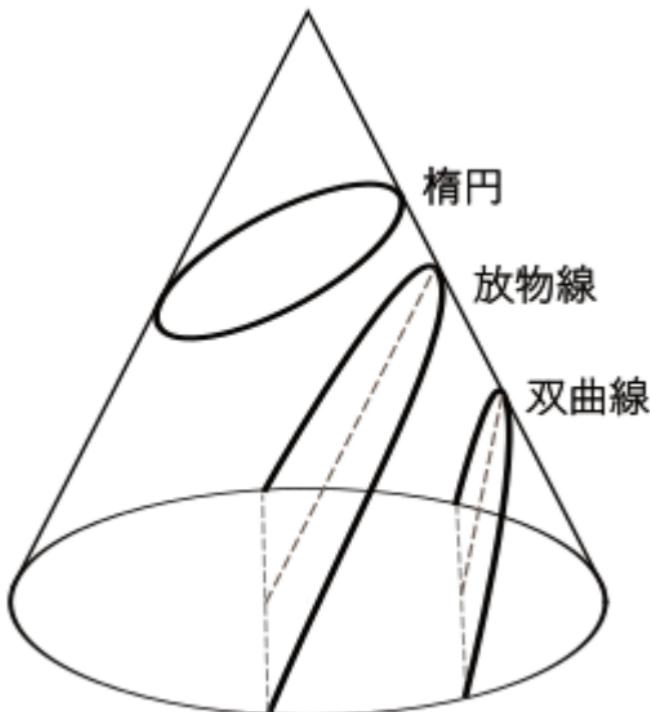
一行さんの話は止まらない。だけど何を言つてゐるのか相変わらずわからない。

「私はようやく気づきました。ナラティブ宇宙論において、ナラティブ志向ベクトルだけを考えしていてもそれは世界の正確な理解ではない、それと同じくらい、現実を志向するベクトルが重要な意味を持つ、と。現実志向という新たな次元を追加することで初めて、ナラティブ時空間における軌跡の本質は二次曲線ではなく円錐面である、という描像によく到達できたのです。これまでの私に見えていたのは、円錐のひとつのかなつかつた」

怪訝な顔をしてるあたしに気づいて、堅書君がノートを取り出した。円錐の図をさらさらと描いていく。

「円錐を平面で切るとする。その切り口は、切り方によつて橢円にも放物線にも双曲線にもなるよね。今まで僕達が片道切符だと思い込んでいたのは、こんな風に、双曲線になるような切り方しか考えてなかつたからだ。でも、切り方を変えれば橢円になる。つまり僕達は、行つて帰つてくることができる」

ボールペンの先がくるりと輪を描く。



「それに気づかてくれたのは、君なんだ」

「あたしが……？」

「いつだつたか、猫を飼うつてことの責任について、話してくれたことがあつたね。勝手に倒れられたらヤタはどうなるんだって」

「…………うん」

「あの話がずっと心に引っかかるつたんだ。だから、一行さんから離心率の話を聞いたとき、真っ先に思い浮かんだのはあの言葉だつた」

そう語る堅書君の顔つきが、今までにないくらい穏やかなのにふと気づく。まるで憑き物が落ちたみたいだ。どこか思い詰めたような横顔だけをずっと見つめ続けてきたから、初めて見るその表情にどきりとしてしまう。

そして思う。その穏やかな眼差しの先に広がる世界は、あたしのものじやない。一行さんのものだ。わかってる。だからあたしは、緩衝地帯までしか立ち入らない。調子に乗つたりしない。

だけど今、あたしは、緩衝地帯の最前線に立つてゐる。行ける範囲の一番端っこ、手を伸ばせばもう少しでその先に届きそうな、ぎりぎりの地点に。

「白状する。この世界に戻れないと言われたとき、それでも行きたいという気持ちは確かにあった。一行さんと一緒にならどんな世界にだって行ける、戻れなくてもかまわない、と。実現まであと一步のところまで来ていたから、エンジニアとしても引き下がりたくないなつた。だけど、君の言葉を思い出して、自問した。ヤタはどうなるんだと。君はどう思うだろうかと。……君を裏切つていいのかと」

話すときいつも目線を合わせてくれなかつた堅書君の目が、切れ長の理知的な瞳が、今日だけはまっすぐにこっちに向けられている。

「それに、先生を失つてあれほどショックだつたのに、僕はあまりに周りが見えていなかつた。君やヤタ、学科のみんな、千古さん、センターの人達、実家の母——残された人達に僕と同じ苦しみを与えることになる。『負の連鎖』だ。これも君の言葉だつたな」

そういうえば、そんなことを言つたような気がする。

「——だから、計算した。文献を調べた。実験した。過去のデータについても解析を全部やり直した。その過程でのパラメータが、現実志向ベクトルが見つかった」
ああ、そうだつたんだ。

てつきり堅書君、ヤタもあたしもみんな置いて、脳死も厭わず先生に会いに行くつもり

なんだつて思つてた。そのための研究に没頭してゐんだつて。もしかしたら一行さんさえ、あたしと同じくそう思い込んでたのかもしれない。

狂つてるつて思つた。そんな堅書君に、絶望してた。

でも、あたしは誤解してた。脳死の話を聞いた堅書君が全力を傾けてたのは、負の連鎖を断ち切つて、ヤタの飼い主としてちやんとここに戻つてくるための研究だつたんだ。

「過去の量子精神データでは、量子ゆらぎに埋もれて検出できていなかつた。それがノイズフロアから立ち上がって有意信号として見えてくるようになつたのは、君とヤタに出会つてからだ。僕の量子精神そのものに、何らかの不可逆な変化があつたのだと思う」

——その言ひ方はするいよ、堅書君。

こんな完全モブ顔のただのエキストラでも、堅書君の人生に登場する意味があつたんてさ。なんかもう、許さないわけにはいかないじやん。あたしを誤解させたことも。死ぬほど心配させて、絶望させたことさえも。

「君もヤタも、現実にちゃんと根を張つて生きている。だから、とつくに知つてて、教えてくれたんだね。戻る現実があるからこそ、人は冒険の旅に出られるんだつてことを」
データは嘘をつかない。

信じてしまつていいんだろうか。堅書君の量子精神データの意味するところを。

「……く」

黙つて聞いていた一行さんの口から、そんな音が小さく漏れ出るのが聞こえた。うつむいて口元をゆがませている。

ヤバい、ガン見し過ぎた。あたしは慌てて堅書君から目を逸らす。も、もしかして、めちゃくちやお怒りでいらっしゃい……ます、か。

一行さんが顔を上げて、強い視線をこっちに向かた。

「ひっ」

「貴方は、私に言つてくださいました。二人ともバカであると。きっと不幸になると」意外にもその口調に、少なくとも敵意は感じられなかつた。

ソーサーにコーヒーカップをかちやりと置いて、一行さんは静かに話し始める。

「……おつしやるとおりです。貴方は正しかつた。私も堅書さんも大バカ者です。常に現実より夢物語に、日常より非日常に目が向いてしまう。やつてやろう、と決めたら周りの声も耳に入らなくなつてしまふ。視野狭窄に陥つていきました。想像力とは、こういう時にこそ行使すべきものであるのに」

言葉の端々に悔しさがにじみ出ている。ああ、一行さんの怒りの矛先はあたしじゃなくて、一行さん自身なんだ、と思った。一行さんはただ、まっすぐあらうとしてるだけなんだ。やると決めたことに対しても真剣で、真摯で、決して諦めない。そのやり方が時々、ちょっと不器用というか、エキセントリックなだけなんだ。

「しっかりと地に足をつけておられる貴方は、私達にはないものを持っています。ナラティブ時空間の向こう側を目指す私達にとつて、いつでも現実に引き戻してくれる貴方という存在は、最後の命綱たりうるのでです」

その表情に、もう悔しさは窺えない。

「あの日、貴方の言葉のおかげで、目が覚めました。——ありがとうございます」

不意に、可憐な花のような柔らかな笑みが目の前に広がった。さっきの動画で堅書君に向けてたのと同じ笑顔だ。こんなの反則じやん。次の瞬間にはもう仏頂面に戻つてたけど、まるで敵わないなって思った。なんかもう意味不明すぎて、一周まわつて笑えてきちゃつた。

「……ふふ」

何でいつの間にかあたしが二人を助けたみたいになつてんだろ。

「あははははっ。いや、ほんとバカだよ、二人ともさ。ベンキヨしすぎて、マジでバカになっちゃつてるつて！」

だって、こんな誰が見たつて主人公級な二人をさ、モブが助けるなんてさ。ありえないよ。めちゃくちやじyan。

「正直、全然ついていけないけど、ちょっとでも何かの役に立てたんなら、良かつたよ。でもさ」

ひとしきり笑つたあと、釘を刺す。ほんと、この二人、ほつとくとアクセル踏みすぎるから、あたしが時々ブレーキかけてあげなきやなんない。現実に引き戻す役つていう一行さんの見立ても、あながち間違つてないかもしねれない。

そしてそれは、自分に刺す釘もある。この役を引き受ける限り、あたしは、ヒロインにはなれないってことだ。

ま、知つてたけど。

「戻つて来れるって言つても、理論上の話jyan。それにどつちにしても一旦は脳死になつちやうんだよね。そこからほんとに安全に蘇生できるの？ だいたい、円錐の切り口を変えて橢円も双曲線も選べるようになるつて、ぱつと見、自由度が増えて余計大変にな

りそななんだけど。……とかさ」

気になる点はまだ大量にあるけど、ひとまずここで止める。堅書君と一行さんは困った
ように顔を見合させてる。

「二人ともすっかり行ける気満々みたいだけど、絶対確実って言えないうちは……まだ許
したわけじゃないから。そこそこ、誤解しないでよね」

「……流石だな。問題はそこなんだ」

ほーらやつぱり。甘いんだよね、詰めが。

「もちろん、やるからには安全な手法を確立せねばと思つていてる。戻ってきた量子精神の
物理脳神経との再同調については、プロトコールはほぼ確立したといつていい。ただ、そ
の……量子精神データのナラティブ時空間での振る舞いについては、まだまだ知見が足り
ていない。変数が多くすぎる」

「私も四月以降、修士課程で模索せねばと思つています。円錐の切断平面の任意性を絞り
込むには、量子精神データをナラティブ時空間に対して適切にマッピングせねばなりませ
ん。数千兆ものパラメータをどうクラスタリングし、どの次元に射影すればよいのか

え、何？ そこで悩んでんの？

「ちょっと待った。そのデータってスペース？」

「え？」

話を遮ったあたしをぽかんと見つめる二人。

「まつたくもう。内職ばっかで講義聞いてなかつたでしょ。だから言つたじやん、ベンキヨしすぎるとバカになつちやうって」

初めて、この二人に勝てた、って思った。

「——そのへん、あたしの卒論」

二人を送り出し、必ず連れ帰すために、あたしができること。現実サイドに立つあたしにしか、できること。

修士課程でほんとにやりたいことが、ようやく見つかった気がした。

(三)

喫茶店を出たあたしたちは、再び本部構内を時計台方面に歩いてゆく。堅書君のお母さ

んが仕事を早く切り上げて、息子の晴れ姿を見に大学まで来てくれるんだって。ね、ほら、堅書君。お母さんのためにも絶対戻つて来なきやダメだよ。堅書君はさ、自分がどれだけたくさんの人から大事にされてるのか、無自覚すぎるんだよ。口には出さずに、一行さんと会話に興じる横顔をチラ見する。でも、その幸せそうな表情を見ちゃうと、もう本気で怒る気にはならなかつた。

工学部界隈まで戻つてくると背後から呼びとめられて、その懐かしい声たちにあたしはちょっとだけ、泣きそうになつた。

「おーい、堅書君！……って、あれ？」

「え？ もしかして、もしかしなくとも、堅書君の彼女さん!?」

「きやー、彼女さんだつ！」

「おおうう。このお方が、か、堅書の……。うぐうう……！」

振り向くと、演習の班のみんなが勢揃いしてゐる。

「ども、初めましてっ！ 堅書君にはいつもめっちゃお世話になりまくつてます！」

「や、急にすいません。僕ら堅書君と同じ学科で、演習の班が一緒で」

「……は、初めまして。一行、です」

たじたじとしてる一行さんに、堅書君はみんなのことを真っ赤になりながら紹介する。

「い、一行さん。こちらは、前にも話しましたけど学科の同級生で——あたしたちをぐるりと見回してから続ける。

「僕のことをずっと支えてくれた、その、大切な仲間……なんです」照れながらもその顔は、何だかとても誇らしげに見えた。

「こら、堅書君さあ、ですます禁止つて言つたでしょー！ 五百円ね！」

「いいんだよこの二人はよお！ 敬語で話すカツブルからしか得られない栄養があんだけよ！ ぐぬぬ……」

ノリのいいこいつらを見ると、ほんとに変わらないな、きっと十年後もこんな感じなんだろうなって思う。

「ちょっとお、堅書夫妻と三人で今までどこにフケてたの！」

大正レトロな着物に身を包んだ小動物ちゃんがひそひそ声で話し掛けてくる。うちの学科では珍しい就職組だ。東京の会社だつて聞いてる。

「あー、ごめん。ちょっと積もる話があつてさ」

「もう、みんなで写真撮ろうってずっと探してたんだよ！ 私も堅書君も今日でお別れだ

しね

「写真！ いいじゃん！ 撮ろう撮ろう。どこで撮る？」

「んー、七号館の前とかどう？ やっぱ演習ってこここのイメージ強いし」

七号館の入口にみんなで陣取る。ふと見ると一行さんは少し離れたところに一人ぽつんと立っていて「撮りましょうか」と手を差し出した。

「じゃーん、自撮り棒あるんだよね！ それより一行さんも一緒に撮ろ！ こっちこつち！」

「……学科の仲間の記念写真なのですから、私が入るのは場違いなのでは」

「何言つてんの！ うちら、一行さんの話のおかげでこんだけ結束できたんだからね！」「はは、そりやそうだな。ほら、一行さんはここ！ 堅書君の隣ね」

全員に手招きされて、一行さんは欣然としない表情で堅書君の隣、あたしの斜め前に並んだ。かすかに柑橘系の香りがした。

「もっと寄つて寄つて！」

ハデ子が前列の一一行さんと堅書君の肩を両側からぐつと密着させる。二人の耳に同時に朱が差した。後ろのあたしからはバレバレだ。中学生か。

「はい、チーズ！」

押しくらまんじゅう状態になつて七人の体温を感じながら、みんなで変なポーズで集合写真を撮つた。その場でWiZにアップしてもらつて、さらにひとしきり盛り上がつた。写真の中の一行さんは相変わらずにこりともしていなかつた。だけど、彼女の色白の頬がちよつとだけ上気してゐるのが、あたしにははつきりとわかつた。

互いに少し別れを惜しんだあと、堅書君と一行さんはお母さんとの待ち合わせ場所であるクスノキのほうに去つて行つた。絵になる一人の背中を見送つてると、あたしの隣にいた眼鏡君も遠ざかる二人を見ながら、「あいつ、またちよつと変わつたな。……いいほうに」つてぽつりと言つた。

「だね」

「三回生の頃は心配したけどさ。元に戻つたっていうか、むしろ昔より楽しそうになつて、ほんと良かつたよ」

「うん。あたしもそう思う」

「彼女とも仲良さそうで、安心した」

「……ん、そだね」

眼鏡君は正面を向いたまま、少し黙ったあと、「……や、それにしてもさ、アルタラセンターなんてあいつほんとすごいよな。いろんな意味で」と言つた。

「だよねー。マジでうちの学科一番の快挙だし、学部卒で入るつて意味不明だし」

「やっぱさ、変人なところは変わんないな」

「うん。相変わらず、めっちゃ頭おかしい」

「今に千古先生を超えそうだよね」

「ふふ、もうとっくに超えてんじゃないかな。普通に」

やつぱり堅書君はどこまで行つてもとんでもない変人で、この先もずっとあたしたちは、それをネタにいくらでも盛り上がりがれるんだろうな。そんなことを思った。

(一)

マンションのチャイムが鳴る。インターでロックを解除し、ドアを開ける。梅雨空をバツクに、堅書君が大きな段ボール箱を抱えて立っている。

「やつほ」

「悪い、遅くなつた。明日の準備に思つたより時間がかかるて」

そう言いながら段ボール箱を上がり框に置く堅書君。上面のフランプを開けると早速、真ん丸な二つの瞳と目が合つた。

「ヤター！」

胴体を持ち上げようとする堅書君より早く、箱からひよいと飛び出して、立てたしつばを揺らしながら足元に寄つてくる。

「よーしよしよしよし、元気だつたー？ んー、久しぶりだねえ。エグいねえ」

かがんで上半身をわしゃわしゃする。ヤタは顔をあたしの手に押しつけてすりすりしてくる。

「はは、やつぱり、いまだに僕よりよほど懷いてるな。あ、これ、当面のフード」

「ありがと。わざわざ桂までごめんねー。雨、大変だつたでしょ」

「いや、センターの車で来たから」

「は？ 社用車でしょ!? こんなことに使っちゃつて大丈夫なの？」

「わりとみんな勝手に使つてるかな。買い物とか、帰省とか」

「アルタラセンターゆるすぎ！」

卒業と同時に堅書君はある安アパートを引き払つて、今はアルタラセンターのすぐ隣で暮らしている。相変わらず職住接近でワーカホリックなどころは変わつてないけど、ちゃんとお給料もらうようになってからは少しはまともな生活になつたみたいだ。そういうえばヤタもちょっとだけ太つたかな？

段ボール箱の中にはお気に入りのタオルやおもちゃも転がつていて。猫用キャリーにはどうしても入つてくれないので、この段ボール箱は居心地がいいのかおとなしくしてくれるので、ヤタを外出させるときは結局いつもこれだった。

「で、明日から三ヶ月？」

「ああ。いつもわがままばかりで本当に申し訳ないけど、あらためて頼む。三ヶ月間だけ、ヤタを預かってほしい」

堅書君は深々と頭を下げる。

京斗大を卒業したあたしたちは、それぞれの道に進んだ。堅書君は晴れてアルタラセンターへ。あたしと一行さんはそのまま大学院の修士課程へ。堅書君は業務の傍ら、先生に会いに行くための方法の研究開発を着々と進めていった。アルタラを直接触れるようになつて、やれることが格段に増えたらしい。一行さんのナラティブ物理学も、あたしが卒論で使った手法を取り入れて大改造することで、ホラ話から科学の言葉で語れるまでになつた。これでもあたし、かなり頑張つたつて自負してる。未だに、一行さんの領分は完全には理解できていけど。

堅書君のやろうとしてたことは、入所早々、センター長の千古先生にあつさりバレた。

千古先生は怒るどころかめっちゃ面白がつて質問攻めしてきたらしい。やれ精度が数桁足りないだの安全性評価がなつてないだの、集中砲火を浴びたよ、と愚痴る堅書君はやけに嬉しそうだった。やっぱドMだ。一度あたしも一緒に、御所の近くのセンターに説明に行つたけど、千古先生はそれはもう楽しげに、

「^{なおみ}直実い、アイデイアは抜群に面白いんだけど、それを形にするための経験値はまだまだ

足りてないねえ。法に触れない申請書の書き方とか関係各所への根回しとかさ。そういう厄介事は、こっちで巧いことやつとくから。こういう時こそ、上司は利用し尽くさなくつちや」

とか、

「これは徐君たちには、当面黙つておいたほうがよさそうだねえ。うん、大丈夫、僕は守秘義務は守るし、君たちが誰の邪魔も受けず自由に研究できるよう、全力を尽くすのがセンター長の役目だからね」

なんてニコニコしてて、やっぱこの先生頭ぶつこんでるなと思ったけど、頼もしさは半端なかつた。別の世界に行けるなんて半信半疑だったあたしも、千古先生の厳しい無茶振りに応えて検証実験が積み重ねられていくのを見てるうちに、少しづつ自信が持てるようになってきた。

何度もシミュレーションや実験を繰り返して。納得するまで解析を繰り返して。時には壁にぶつかって。徹夜で議論して。

気がついたらあつという間に三年の月日が過ぎていた。そして明日、堅書君の秘密の計

画がついに始動する。

二人で玄関にしやがみ込んで、同じ目線の高さでヤタをあやしながら、とりとめのない話をする。昔みたく、玄関の数十センチ四方の空間だけがあたしたちの奇妙な緩衝地帯だ。せつかくだし上がつてよ、コーヒーカップ淹れるからさ。そんな言葉を今日もあたしは絶対口に出さないし、堅書君もそれ以上踏み込もうとはしない。

「三ヶ月って言つても、あっちにそんだけ滞在できるわけじゃないんだよね？」

「うん。三ヶ月の内訳のほとんどは準備とリハーサル、戻ってきた後の回復期間に充てられる。前にも言つたかもだけど、あまり長居してしまうと量子精神と物理脳神経のずれが大きくなりすぎて、再同調できなくなる。だから主観的時間尺度で数時間が滞在の限界だろうな」

「たつた数時間のために三ヶ月かー。ほんつとバカだよね」

「三ヶ月どころじやない。僕にとつては十年だ」

そう言う堅書君の視線はどこか遠くのほうに投げかけられている。あたしには見えない、遙か先にある何かに焦点を結んでいる。

「十年。ヤバいねー」

「ヤバいな」

「ほんとに行けんのかな」

「行けるさ」

「自信満々じやん」

「昔、身をもつて体験したんだ。だからできるって信じている」

「またまたあ！ ヤバいね」

「ヤバいな」

まるで同意したみたいにヤタが小さく鳴くと、へそ天状態で寝そべった。その首筋をそつとさすってやりながら、ずっと訊けずにいた質問を堅書君にぶつけてみる。

「あのさ、堅書君がそこまでして会いたい先生ってさ、どんな人なの？ 写真とかないの？」

「何も残っていない。写真の一枚もない。アルタラにも記録されていない」

「ふうん、そつか」

先生がなぜ別の世界にいるのか、堅書君と何があったのか、結局あたしは知らない。

「だから今回、僕が覚えている限りの先生の人生を全部、ノートに書き出した。この世界に先生が確かに存在していたことを、自分なりに記録しておきたいと思った」

堅書君は、背負つたままだった黒いリュックから水色のノートを取り出して、パラパラとめくつた。中身までは読めなかつたけど、細かい字がびつしりと書き込まれている。

「その過程で最近、思い出したんだ。君が助けてくれたのは僕達だけじゃなかつた。僕の先生もまた、かつての君に助けられていたつてことを。いや、違うか。かつて……じゃないな。過去じゃない。だから君だつたのかな。ああ。そうか。なるほど」

何やら一人で納得して一人で驚いてる。相変わらず堅書君の話は論理がぶつ飛んでて、まるつきりわけがわからない。このぶつ飛び具合があたしは好きだつたんだ、と思う。

「ふふ、そうかそうかー。じや、先生によろしくつて伝えといでよ。で、先生の写真撮つてきて」

「写真、か……。はは、善処するよ」

堅書君は鼻で笑つた。

「なにそれ！ やつぱ全然戻る気ないでしょ！」

「……猫を飼うつてことは」

ついと堅書君が手を伸ばして、ヤタの小さなおでこを指の腹で撫でた。気持ちよさそうに目を細めるヤタ。

「そういうことにも責任を持つ、ってことだったよね。だから僕は——絶対に戻る」立ち上がってそう言い切ると堅書君はノートをリュックにしまい、再び左肩にひっかけた。

「そ。やつとわかった? 猫を飼うつて、そういうことだかんね」

あたしもヤタを抱いて立ち上がる。

三ヶ月後、ヤタが帰る先は、今の堅書君の家じゃない。堅書君と一行さんの新居だ。そ
う、聞いている。

ヤタと一緒に、堅書君の目をしっかりと見すえる。無造作に跳ねた髪を、変わり映えの
しないワイシャツを、こめかみの傷を、記憶に焼き付ける。

「何度も言うけど、ヤタを預かるのは、あくまで一時的なものだから。ちゃんと引き取
りに来なかつたら、絶対許さないから」

「ああ、わかってる」

「無事に戻ってきて、ヤタを引き取つて、そんでもつて一行さんと、ちゃんとこの世界で

え」

ふと、思いを馳せる。もしかしたら、無数にある多元宇宙のどこかには、堅書君の隣にあたしがいた世界もあるんだろうか。

この世界は違う。ここは、堅書君と一行さんのための世界だ。彼らが幸せになるために存在する世界だ。あたしはモブ顔のただのエキストラで、それ以上でもそれ以下でもない。それでも。

堅書君。あたしは、堅書君が。

「——幸せになつてみなよ、バーカ」

悪態をつきつつ、目一杯笑つて、あたしは堅書君を送り出す。玄関の外に。別の宇宙に。「ああ、やつてやるさ」

堅書君も負けじと不敵な笑みをこっちに向けた後、玄関のドアを開けた。雨脚はかなり強くなっていた。「じゃ、また」吹き込む雨粒をよけつつ、堅書君はマンションの廊下の奥に消えていく。

ゆっくりと音を立ててドアが閉まつた。玄関にはあたしとヤタと段ボール箱だけが残された。

ヤタの温もりを腕の中に抱きかかえたまま、あたしはのろのろと、閉ざされた緩衝地帯にしゃがみこんだ。最後まで言えなかつた言葉をぐつと呑み込む。鼻の奥がつんと痛んだ。

「バーク……」

首を伸ばしたヤタが、あたしのほっぺたをペロペロと舐めた。ヤタの小さな舌はざらざらしてて、ちょっとだけ痛かった。

(一一)

研究棟の屋上に出ると頭上に七月のまぶしい晴天が広がつて、寝不足の目を思わず細める。ここからは京都市街が一望できる。今朝の空気は、梅雨明け直後の京都とは思えないほどにからつとしていた。京都タワーや清水寺^{きよみずでら}はもちろん、比叡山^{ひえいざん}や音羽山^{おとわやま}までがくつきりと見える。

土曜日だつていうのに、屋上にはすでに十数人の学生や教職員が陣取つて、三脚にスマ

ホをセットしたり、SNSで最新情報を漁つたりしている。何かのイベントで十数年ぶりに自衛隊の飛行機が滋賀県上空を展示飛行するんだそうで、物好きな人達が桂キャンパス近辺で一番高いこの建物に集まってきたのだつた。と言つてもここから滋賀までは距離があるし、ほんとに見えるかどうかはかなり怪しい。計算上は見えるんだとか、近くの山から大津^{おおつ}プリンスホテルの先端が見えたとか主張してゐるやつらもいて、あーはいはいとか思いながらも、結構あたしは楽しんでたりする。

二〇三七年七月四日、午前十時過ぎ。計画通りなら今頃、アルタラセンター管轄下のクラス3区域内で最終シーケンスが走り始めてるはずだ。センター長の千古先生によつて巧妙に人払いされてて、あたしも現場に近づくことはできない。そもそも堅書君と一行さんがいるのはアルタラセンター内なのか、というより京都市内なのかすらわからない。まあ、物理的な場所なんてどうだつていい。彼らの量子精神データはもうあと数分以内には、別の宇宙に向けてナラティブ時空間での遷移を始める。今日の二人は文字通り、物語の主人公だ。ん、違うか。最初からずつと主人公だったのかもしれないって思った。きつとこの宇宙が生まれる前から。あのバカツブルめ。

あたしがやることは全部やつた。だから今は無事を祈るだけだ。

ふと周囲を見回すと、隣の研究室の眼鏡君も上がってきてて、右腕を前に伸ばして握りこぶしで仰角を測つたりしてゐる。

「やつほ。土曜なのに物好きだねー」

「お互いな。ていうか、土日いつもいるよね」

「そっちこそ！」

百人近くいた学科の同級生のうち、未だに大学に残つてるのは数えるほどで、彼はそんな数少ない腐れ縁の一人だった。コンサルや金融、ＩＴ企業や大手電機メーカーに就職し、王道な人生に向けて着実に歩みを進める仲間たちを尻目に、博士後期課程という醉狂な道を選んだあたしたちは変人の仲間入りをしたのかもしれなかつた。

だけどやつぱり、堅書君に比べたら普通すぎる人生だと思つた。二回生から千古研に入りして、学部卒でサクッとアルタラセンターに入っちゃつて、彼女さんを連れて先生に会いに、今にも物語の大平原を渡ろうとしている堅書君は、とんでもなく頭おかしい。その計画の一部に加担した立場としても、その思いはぬぐえなかつた。

「そろそろじゃないかな。僕の時計で一分切った」

「どの辺かな」

「滋賀だから……比叡山のほう?」

眼鏡君はしきりにスマホのコンパスと山並みを見比べている。

「アバウトすぎ! 琵琶湖びわことか見えないかなあ」

「さすがに湖面は無理だろ。でも琵琶湖の花火はギリ見えたらしい」

「え、こつから花火見えんの! めっちゃ見てみたいんだけど!」

「宇治川花火大会でよければ、今夜だよ。……どうせ夜まで研究室なら、またここ上がつ
てきなよ」

「今夜!? マジで? え、ヤバ、なんでそんなの把握してんの!」

「……するだろ、普通。……こういう時用に」

「は? なんで!? しないって!」

急に、屋上の手すりの前に陣取つてた人達がざわめき出した。北東の空を指差しながら
声を上げてる。

「え、来た? 来たの!? どこどこ?」

「どこだろ、見えないな」

みんなが見てる方向に目を向けてみたけど、それらしいものは何も見えない。

「あ。……あれか。もしかして」

「え！ どれ！ わかんないんだけど！」

「ほら、鉄塔の左から三番目……あ、四番目。結構速い」

よくよく目をこらすと、ゴマ粒みたいな点の集合体が山の端ギリギリのところを北から南に向けて少しづつ移動している。

「ちっさ!! めっちゃちっさ！ 点じやん、点！」

「あー、さすがに遠かつたかあ」

「もつとゾオオオってやつ想像してたのにー！ パイロットの顔が見えるくらいの。詐欺
じやん！」

「ああいうのは近くから望遠で撮ってんだよ。こんな十何キロも離れてない。……あー、
くそ、山に隠れた」

予想以上にしょぼい飛行にがつかりして研究室に戻ろうとすると、さつきより大きな歎
声が背後から聞こえた。

「え？ ……あ！」

「一旦は比叡山に隠された機体たちが、右側から再び現れた。だいぶ近い気がする。尾を曳くスマーケがゆるやかな弧を描き始めた。

「やつた！ こっち来た！」

「仰角高いな！ もしかして山科あたりまで來てるか!?」

突然、六機の姿勢がいつせいに傾き、花が咲くように四方に散開した。

「うわっ……!?」

「え!?」

それぞれの機体は大きく旋回態勢に入る。時間差でキラリと光りながら、ダイナミックな機動で空の高みを駆けてゆく。抜けるような濃い青空に純白のスマーケがぐんぐん伸びて、くつきりと鮮やかな六条の円弧が同時並行で描かれていく。

やがて各機体が旋回を終え、各々の真っ白な航跡は閉じた円を形づくる。ちょうど大文字山の上空あたりに、天使の輪のような巨大な橙円が六個、浮かび上がった。一つの輪の周りに五つの輪が重なって、まるで五弁の花びらみたいだ。

「エグいねー……」

「ああ……」

あたしたちはバカみたいに口をぽかんと開けて、天空に正確に作図された円の重なりをただ見つめることしかできない。その光景はきっと、この千年の古都でさえ初めて仰ぎ見る非日常なんだろうと思う。千年前の人を見たら何て言うかな。何も言葉が出てこないあたりよりはマシな形容するだろうな。

「サクラと……レインフォール？ や、サンライズかな」

眼鏡君でさえ、どこか声が上ずって、少しかすれている。

気がつくと機体は再び一箇所に集まり、北の空に向かつて小さくなつてゆく。

「あ、もう行っちゃう」

今頃になつてコオオオというかすかな音が上空から耳に届き始める。次第にスマーケの白い航跡が薄くなり、ゆっくりと青空に溶け出していく。

「……消えちやつた」

数分後にはただ夏の空だけがそこに広がつていて、さつきまで六つの輪つかが浮かんでいたなんて、まるで信じられなかつた。夢だつたような気すらしてしまつ。

「やべ、写真撮るの忘れた」

「あ、あたしもじゃん！ ちょっと、なんで撮ってないの！ 当てにしてたのに！」

「人を当てにすんなよ！」

圧倒されすぎて、完全に忘れてた。だけど、まあいつかって気がした。写真や記録に一切残らない思い出があつたっていいじゃん。記録に残らないからこそ、自分の目しか信じられないからこそ、もう一度見たいと思える。会いたいと思える。

堅書君はもう先生に会えたかな。全然違う時間軸だから「もう」ってのも変なんだけど、きっと会えただろうなって思った。彼らの軌跡は橢円を描いて、千古先生でさえ到達しえなかつた地平に到達する。そして絶対、ここに戻つてくる。ヤタとあたしが待つてこの世界に。あの航跡を見た瞬間、もう大丈夫だつて思えた。

もう大丈夫だ。あたしも。きっと。

屋上に集まつてた人達もばらばらと散り始めている。いつもの土曜日の研究棟の風景が戻つてきつつある。ああ、そうだ。月曜の午前三時までに国際会議用の予稿を投稿しなきやいけないんだつた。ずーんと心が重くなる。非日常は一瞬で終わつた。厳しい現実つ

てやつに戻るしかない。

「じゃ、僕、先戻るから」

「あー、うん。おつ」

階段のほうに向かった眼鏡君は、急に止まってこちらを振り向くと、

「あ、花火。一応、今日の十九時四十五分」

とだけぼそつと言つて、また歩き出した。背中越しに声をかける。

「ふーん。今日も研究室泊まんの？」

眼鏡君は歩きながら、こちらを振り返らずに答える。

「悪かつたな。どうせ泊まりだよ。デバッグ終わりそうにないし」

「あっそ、あたしも予稿の締切まであと四十時間」

「……死ぬなよ」

「そっちこそ」

ふと、大文字山の方角を見やる。そこにはもう、あの大輪の花の痕跡は何もない。でもさつきの、ちょっと、楽しかったな。

——この灰色の研究棟にも、もう一回くらい、非日常があつたつていい。

戻る現実があるからこそ冒険に出られるつてあの二人は言つてたけど、ちょっと違うんじゃないかな。たまに冒険があるからこそ、現実を生きていける。それがあたしにとつてのリアルな気がした。

あたしは一呼吸置いて、遠ざかる背中に向かつて声を張り上げた。

「おつまみとか要るー!?」

五メートル先で、眼鏡君の足が止まる。こっちを振り向く。

「その状況で飲む気かよ！……まあ、飲むなら、僕もつきあ————」

「ノンアルに決まつてんじやん！　さすがに飲む勇氣ないって！」

無駄に距離があるだけに、大声でのラリーが続く。

「だよな……ヤケクソになつたんかと思つた」

「……写真、どうせ撮るんでしょ。今度こそよろ！」

「や、だから当てにするなつて！……ま、そうだな、一応、超望遠持つて来るよ」

そう言うと眼鏡君は、片手を軽く上げて階段を下りていった。

十九時四十五分か。意外と遅いんだな。一旦帰つてヤタにごはんあげて、コンビニで何か買つてくかな。お酒は我慢。一人ともさつさと現実に戻んないとほんとヤバいからね。

一時間でスパッと戻る現実逃避。システム権限で三ヶ月もほつつき歩いてるどつかの変人バカッブルはマジ見習えっての。

気がつくと屋上にはあたし以外誰も残つてない。ついさっきまでからりとしてた空気はいつの間にか京都特有のじつとりとした湿り気を帯びて、辺り一帯は早くもサウナみたいだ。

いつもの京都の夏が始まろうとしている。祇園囃子ぎおんと五山送り火ごさんのおくりびに彩られる季節が今年もやってくる。

だけどあたしにとつては違う。いつもの夏じゃない。三ヶ月限定で、真っ黒な導きの神様がついてくれてる、初めての夏だ。ここはきっと、去年までと違う新しい世界で、今度こそあたしは迷わない。そんな特別な夏が始まる予感に、浮かれすぎんなよ、あと四十時間、と自分で自分を戒めながら、あたしも研究室に向かつて階段を下り始めた。

(了)

エキセントリシティ

a

一〇一三年九月二一〇日 初版発行

一〇一四年一〇月一七日 修正版発行

発行者 a

印刷所 viviostyle

Twitter @a23324094

<https://www.pixiv.net/users/59321047>

(C) a 2023

本作品は非公式の二次創作作品です。

本作品の無断改変および営利目的での複製・転載を禁じます。